
空ノトリカゴ

天宮 遙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空ノトリカゴ

【Nコード】

N4653I

【作者名】

天宮 遙

【あらすじ】

王の住む空の城 それは、永遠の平和と繁栄の象徴。 その筈だった。***広大な砂漠の真ん中に、魔法の息づく小さな国が存在した。伝説は語る。荒れ果てた大地を前に一人嘆く若者がいたことを。若者は親友の魔導師になんとか豊かな土地に変えられないかと相談し、魔導師は持てる力の全てをもって空に浮かぶ城を作り上げた。空の城は豊かな雨をもたらし、大地は命の喜びに満ちた。その日から永劫続く幸福の最中に居るのだと、少女は信じていた。

あの日、其れに気付くまで。

序

今にも崩れ落ちそうな煉瓦の壁。歪んで窓枠に嵌らなくなった窓板。似たようなボロい家が幾つも立ち並ぶ路地に、今日も降り注ぐ、冬日の柔らかな陽射し。

柔らかな陰影で描き出された優しい空間に、あんなたちとつと働きな！もうすぐ時間だよ！と威勢の良い声が木霊する。

同時に、其処彼処からどたばたと賑やかな音が狭い壁と壁の間を反響する只中を、少年は一人全力で走って自分の家のある集合住宅に辿り着いた。

何度も何度も今日まで乱暴に扱われてきたのだろう、カーテンの方が余程役に立つとも思える扉を今日もまた走ってきた勢いそのままに力任せに蹴りを入れて行く道を開くと、これまたどんなに慎重に足を運んでもギイギイと盛大に悲鳴を上げる階段を、何のためらいも無く一足飛びに騒音を轟かせながら少年は駆け上がる。

二階、三階と螺旋階段を駆け登る少年に、下の方からカラカラと笑い声が追いかけて来た。

「お帰り。早く仕度おしよ？もうすぐ時間だしねえ」

「うん、わかつてるよ、おばさん！」

少年は元気良く答えると、残りわずかな階段を駆け上がって自分の家に転がり込んだ。

そのまま家にあるありつたけの器という器を引っ提げると、少年は今度はアパートの屋上を目指す。

広く開けた屋根の上。そこには同じアパートに住む数人の子供達と若い母親が並んで器を屋上に敷き詰めていた。

その隣に立って、少年も同じように器を並べていると、先ほど階段で少年に声をかけた人だろう、恰幅の良い女性が屋上に上がってきた。

「よし、準備は出来てるようだね。ほら、チビども、ぴしっとして

ここに並びな！」

女性が号令をかけると、子供たちはきやいきやい騒ぎながら横一列に並んだ。

その横に少年も並んで遙か空を見上げた。

薄黒い雲の塊が、ゆったりとこちらに近づいてきている。

それを見ながら、少年はほう、と安堵の溜息をついた。

「この早さなら、長めに雨が降りそうだね」

「良かったわ、これからの季節、何かと水が入用なもの」

「大瓶一杯に水が溜まつたら楽になるさ。さあ皆、手を組んで、ちやんと祈るんだよ！城と、王様にありがとっつてね！」

女性の掛け声に合わせて、子供たちはいっせいに跪いて熱心に祈り始めた。

少年も、若い母親も、子供たちの隣で深々と頭をたれた。

中年の女性は何やら感謝の言葉を呟きながらしつかりと空を見据えた。

彼らの頭上に、さああああ、と音がする。

町全体が白い薄煙に包まれる中、時折ぽつぽつ、とかき鳴らされる、命の音色。

その静かな音楽の中にあつて、彼らは身動き一つせずただ穏やかに身の内に喜びを感じ取る。

見渡す限りの屋根の上で、似たような光景が広がっていた。

+ + +

広大な砂漠の中に、宝石のように美しい国が存在した。

伝説は語る。かつて、荒れ果てた不毛の大地を前に、一人嘆く若者がいたことを。

若者は魔法使いに相談し、魔法使いは持てる力の全てをこめて空に浮かぶ城を作り上げた。

空の城は、乾燥しきつたこの国の大地に雨を降らせ、潤いをもたら

し、広がる荒野は瞬く間に豊かな実りを育む豊穡の地となった。

空の城がある限り、この国は平和で豊かな国となるう。

魔法使いの言葉通り、国には幸せが満ち満ちた。

若者は王となって空の城に住まい、魔法使いはその左に坐して王と城を守った。

城の下には恵み豊かな大地と穏やかに暮らす民。

何百年、何千年経とうと変わらぬ、平和な風景。

そして。

巡回航路に沿って国中を巡り、命の水を人々に施す天空の城の姿は、そこに住む王の姿と相俟って、人々から尊敬と崇拜を享受していた。

「可愛い私のジヨゼフィーヌ、ほら、お人形をあげようか、それとも、甘いケーキが良いかな？なんでも言ってごらん、おじちゃまが全部叶えてあげよう」

セピア色にくすんだ風景の中で、白いウサギの愛らしい目がぎよろつとこちらを見ていた。

毛むくじやらかなそれが近づいてくるのが嫌で、傍にいた人の服の裾を掴んで視界を遮ったのに、でつぶりと太った男はなおも布の壁を回り込ませるようにして人形をジヨゼの視界にねじ込んでくる。

「ほづら、ウサギちゃんもネコちゃんも、可愛い可愛いジヨゼフィーヌとお友達になりたいよーって言ってるよ」

嫌、イヤ、私そんなの欲しくない！私、そんなの要らない！どうして皆私がそんなの欲しいと思ってるの！？私何時そんなの欲しいって言ったの！？

お願い、来ないで！嫌ったらイヤなのー！！

不意にひよいつと誰かがジヨゼの体を抱き上げる。突然の事にビックリしてジヨゼの目に滲みかけてた涙も引っ込んだ。ジヨゼは大きな目を更に大きく見開いて、前の顔をまじまじと見詰めた。年は十二、三だろうか。ジヨゼと同じ金色の巻毛を後ろで一つに束ねた男の子が、にっこりと微笑んでいて。

「初めまして、我が姫。このクリスマスに姫のお望みをお伝え下さい。何でも叶えて差し上げましょう」

言ってることは先ほどの男と同じ事なのに、何故だか不思議と安心できて、ジヨゼはクリスマスにしがみついて思いつきり声を上げて泣き出した。

+
+
+

隙間無く積み上げられた石の壁。或いは優美な曲線を描く真鍮の柵。王国成立当初からの国土だった旧市街地の華やかな町並みの中心に、ひとときわ広大な敷地を占める閑静な一角があった。

大きな石畳の道がその真ん中を貫いた、その片側に広がる大豪邸。輝かんばかりに磨き込まれた白大理石の壁と、そこここに施された金装飾と。寸分の隙も無く手を入られた庭園には、幾何学模様を描くように水路が張り巡らされ、その両側には多量の水を必要とする園芸種の花々が色とりどりに咲き誇る。その水の全ての源、尽きることの無い豊かな流れを庭に注ぎ込む女神の壺から零れ落ちる流れが水飛沫をあげて虹を作り、吹き上げられた噴水が優美なアーチを形作りながら庭の小路を跨いで反対側へと空中を渡ってゆく。その水の天蓋がつくりあげる無数の煌きの下を、少女が一人、颯爽と黒いローブを翻して歩いて行く。

爽やかな庭の、爽やかな朝。しかし。

「何たる不覚。あんな夢見るだなんて、寝覚め最悪」

少女 ジョゼの気分は爽やかさからは程遠かった。

よりもよって一番見たくない類の夢だった。

力が足りなくて、何も出来ずに自分の意思さえ伝えられず、拳句クリスに助けられて泣きじゃくった幼い日の記憶。ジョゼの一番古い思い出。

今ならあんな状況になりはしないのに、屈辱も良いところだ。

疲れてたのだろう、疲れてたんだ、じゃなきゃあんな夢見るはずがない。

ジョゼが一人で勝手に夢の分析を終えたその時。

「おはようございます、お嬢様」

ジョゼの歩いて行く先に、男が一人、居住まいを正してたたずんでいるのに気がついた。

その姿を見止めて、ジョゼの片眉が少し跳ね上がる。

「おはよう、レイ。今日は一人？」

「ええ。クリス様より朝お迎えに来られないことへの詫び状が届い

ております」

そう言いながらレイは手紙というよりも辞書ほどもありそうな分厚い紙の束を差し出した。

「お読みになりますか？」

「　　けっこつよ。どうせ歯の浮くようなコトしか書いてないものうんざりしたように手をひらひらさせると、レイは紙束のかわりにずっしりと重たい革の鞆をジヨゼに手渡した。

「では、行ってらっしゃいませ、お嬢様」

その声と同時に、ぎぎぎ、と音を立てて華麗な鳶模様を施された門が開いて行く。

その先にある黒い塊が一齐に色めき立つのがジヨゼからはっきり見えた。

(……………逆玉しか頭に無い馬鹿どもが！)

ジヨゼはきゅつと唇をかみ締めるとずんずんとその群れのと真ん中に向かって歩き出した。

「おはようございます、ジヨゼフィーヌ姫！」

「進級おめでとございます、姫！」

「最高学年へと進まれて今年もなお一層姫の御活躍をなさることでしょう！」

「私の父も姫に一言御挨拶を申し上げたいと……………」

「今宵は我が屋敷へ！」

「いいえ私の元へ！！」

「我が家ではささやかではありませんが心の籠ったお祝いを用意してございます！」

やいのやいのと黒い群れを形作る男たちが一齐にジヨゼに話しかけるが、それらを虫の羽音の如く無視して、ジヨゼは一直線に歩き、太い道を渡ろうと試みる。

この朝の儀式が始まって八年目。突っ切る方も、突っ切られる方も、もう慣れたものだ。

最初暫くの間は動くことすら出来なくなつて周りを怒鳴りつけて

道をあけさせたりしていたが（そしてもれなくそれをレイに見られていて帰ってこつてり礼儀作法の復習をさせられたが）時がたつと共にジヨゼの背も伸び、取り囲まれる状況にも慣れ、今ではずんずか立ちはだかる人間にぶつからん勢いで歩いていく。

当然、どちらに非があろうとぶつかろうものならジヨゼの不興を買うことは間違い無いので御機嫌取りの連中も一歩引く。そこを更に詰める。更にもう一歩。

そうやっていつものように微速前進する集団の一人が不用意にも誰かにぶつかりよろめいた。

「なんだ君は！少しは周りを見て歩きたまえ！」

大層な格好をした少年は、体面を取り繕うために高飛車な態度を取った。が、それは相手が極悪に悪かった。

「そいつは俺の言葉なんだが……」

ごく低音の絶対零度の声音がした途端、ジヨゼの周りに貼りついてきた取り巻きたちは一斉に蜘蛛の子を散らすがごとく去っていく。一気に開けた視界の先に顔なじみを強制的に見つけさせられると、ジヨゼは顔面の筋肉と日ごろの淑女教育の努力の結果をフル活用してなんとか笑顔を取り繕った。

「あら、アラムじゃない、おはよう」

「挨拶より取り巻きの教育ぐらいしやがれ、このクソ餓鬼。お前のせいで周囲が被害甚大だ」

「またそんなこと！私のこと『クソ餓鬼』だなんて汚い言葉で罵らないで！！」

ジヨゼの笑顔は一瞬で吹っ飛び、正面で冷ややかに見つめる男
アラムに食って掛かった。

アラム・ベリエル。この学校でその名を知らない者は居ない。

その理由は

「ガキをガキ扱いして何が悪い！しかも人様に迷惑かけるようなガキはクソ餓鬼でも上品過ぎて涙が出るぜ！！」

「私が何時貴方に迷惑かけたのよ！ぶつかったのは私じゃないでし

よう!?」

「お前の御機嫌取りしようとして俺にぶつかったんだ!十分お前のせいだろっが!」

ぎゃーぎゃーと罵り合いながら二人の周りにじわりじわりと魔法陣が引かれていく。

その魔法の効果の物騒さときたら、少しでも魔法を勉強したことがある人間だったら脱兎の如く逃げ出すところだ。

寄ると触ると今と似たような展開になる二人。『混ぜルナ危険』のレットルを貼られてしまった組み合わせが鉢合わせたところに共に居られるのは、危険感知能力が欠如しているとしか思えない、いやむしろ危険よきたれ!と待ち構えて楽しんでいる変態ぐらいしか考えられない。

いつもは誰かがとばっちりを被るか敢えて火中の栗を拾いに行く勇者が何とか被害最小限にコトを収めて平穏な時に戻るのが、今日はジョゼが自ら一歩引くという奇跡的譲歩を見せた。

「まあいいわ、今日のところは譲ってあげるわ。だって後もう少ししたら貴方が泣く姿が見られると思うと楽しみすぎて背中に羽根でも生えて飛んでいきそうよ」

ジョゼがくるん、と指先を回すと小さな白い羽根の幻覚が背中に現れた。御丁寧にパタパタ羽ばたいている幻影を目にして、アラムは鼻でそれを笑い飛ばした。

「頭がぶっ飛んでる奴に今更羽根なんざいらんだろう。それに、泣くのはお前だ。先月の学年末試験の俺の出来は過去最高だったからな。お前にデカイ顔させておくのも後少した」

「あら、その台詞もう何度聞いたかしら?結局一度だって八歳も年下の私から学年主席の座を奪えずにいるじゃない?そろそろ、負け犬の遠吠えは聞き飽きたわね」

「なっ!」

「残念ながら総代として今日の入学式で挨拶するのは私よ。ちゃんと素晴らしいスピーチまで考えてきたんだから、アラムは壇の下で

有象無象の中にまぎれて私を眺めていると良いわ」

「そつくりそのまんまお前に返してやるぜ、ジョゼ！」

あからさまなジョゼの挑発に乗って一瞬のうちに先ほどまでとは比べ物にならないほどの物騒な魔法陣を辺りに張り巡らせつつアラムが吼えた、その時。

「相変わらずですな」

気まぐれ勃発な災害と化した二人に近づける数少ない人間がひゅん、と空中に姿を現した。

「学院内の魔法陣の分布を感知すればお二人の居所がたちどころに判るのはなんとも便利なもんですな。ですが、破壊活動はお控え下さいますように」

「校長！」

「アーデガルト先生！！」

吹けば折れそうな小柄な人影　二人の通う学校の校長であるアーデガルトを、ジョゼとアラムは同時に振りかえり、そしてずんずかずん、と並々ならぬ熱意を持って詰め寄った。

「先生、この間の学年末試験、誰が主席だったんですか！？」

「校長、ジョゼに遠慮することなくびしっと言ってください、びしっつとー！！」

ぎらぎらと闘争心を剥き出しにして意気込む若い二人を頼もしげに眺めつつも、その問いに直接答えることなくアーデガルトは予定通りの言葉を紡いだ。

「ジョゼファイヌ・アナマリ・ラ・ブリユイエール、ついてきなさい」

その瞬間、ジョゼは目を輝かせ、アラムはガクつと頂垂れおちた。

「じゃあね、アラム。また後でね」

落胆のあまり声も出ない年上の同輩をふふんと鼻でせせら笑い、ジョゼは手をひらひらと振ってアーデガルトと共に大聖堂の方へと去っていく。

その後姿を見送りながら、アラムは絶叫した。
「また負けた!!!」

+ + +

王立魔法学校。

国中からえりすぐりの才能が集まる楽園。

魔法無くして成立しえなかったこの国において、魔法使いは手厚く保護されてきた。

縁故と賄賂が物言う国の行政官や平和すぎる国内情勢のために今ひとつ存在感と発言力に欠ける軍とは違い、持てる力の強弱こそが唯一の存在意義と言い切る魔法使いは一般庶民が唯一人生の一発逆転を狙える道だった。

魔法は誰もが使えるが、真に強い力を持つものは数少ない。

そしてその強い力を発揮するには複雑な魔法体系を理解する聡明な頭脳と自らの力に飲まれないだけの強い意思が必要で。

逆に言えばその全てを兼ね備えた稀なる人間は空の城に上がり、王宮付きの魔導師として一気に栄耀栄華への道が開けるのである。

そしてジョゼとアラムは、本人にとっては幸運なことに、そして周りにとっては不幸なことに、まず間違い無く、王立魔法学校の長い歴史の中でも屈指の才能を持つ人間だった。

『学生総代、挨拶』

魔法で音量をあげられた声が厳かに式次第を読み上げると、それに応じて華奢な印象の少女が壇上上がった。

その姿を目にするや否や、アラムは反射的にギリッと音を立てて歯を食いしばる。

同時に、周囲の人間が彼女に熱い視線をおくった。

『……本日より始まる貴君らの学生生活がより豊かで実りあるものとならんことを。学生総代、ジョゼフィーヌ・アナ＝マリア・ラ・ブリュイエール。』

最高学年に進級し、名実共に学校の最優秀の学生となったジョゼが誰もが目にする中入学式で在校生の代表として壇上で挨拶する。それを、僅差で敗れたアラムが『今年こそ追い抜いてやる』という誓いをたてながら睨みつけた。

そんなアラムを知ることもなく、壇上でジョゼが金の巻き毛を揺らしながら優美に一礼すると、アラムの周囲、否、講堂中の人間が割れんばかりの拍手喝采をおくった。

……その音は、今年もまたジョゼのご機嫌取りをしようと待ち構えている人の多さを如実にあらわしていて。軽く耳を塞いで聴覚を保護しつつ、アラムは溜息をついた。

どうやらジョゼと言う名の玉の輿にあわよくばと思うものには、あのキツイ性格の彼女が虫も殺せぬ、扇以上に重いものなど持てもしない儂い令嬢に見えるらしい。

ブリュイエールの名が人々の目を晦ませるのか、ジョゼが一応は猫をかぶっているのか、兎も角人間の妄想力の底の無さを実感してアラムはそつと講堂を抜け出した。

少し歩いて万雷の拍手が遠くなってくると、耳を塞いでいた手はずし、ほっと一息をついて角を曲がった。その先に一点の染み一つ

なく白一色に磨き上げられた回廊が目の前に現れる。

円柱のみが規則的に配された幅の広い廊下のそこにテーブルと椅子が配された静かな空間。いつもなら思い思いの場所に研究者や学生が陣取って熱心に討論や読書に打ち込むこの場所は、学院の叡智の源として誰もが愛していた。無論、アラムも。

今日も今日とてここで暫く読書をしながら式典が終わるまで時間をつぶそうと思いついて回廊の一角に陣取り、鞆の中から読みかけの本と今朝母親に持たされたプリンを取りだしながら、ふと回廊に囲まれた中庭に目をやった。

大きな噴水を中心に作庭された回廊の中庭。水を大量に必要とする噴水は、ジョゼの家のような水を豊富に享受出来る大貴族の庭か、魔法学校のような公共施設にしか作れない。その噴水を源とする水路の両側にはこれまた水をたくさん要求する園芸種の花が咲き乱れ、回廊の反対側の屋根の上からも花々が可憐な顔を覗かしている。その屋上庭園にもきめ細やかに水路が廻らされ、至るところで階下に流れ落ちてせせらぎという名の軽やかな音楽を提供していた。

差し込む日の光と、揺らめく水飛沫。透き通る美しさのその向こうに、アラムは不意に友の顔を見つけてしまった。

「クリスマス！」

「やあアラム、もう入学式は終わったのかい？それとも、お得意のサボりか？」

人のよさそうな笑顔を浮かべて回廊の向こう側から近づいてきたのは、クリステイ・セドリツク・セバルカンテイ 突発的災害と化すジョゼとアラムのいがみ合いに臨席できる数少ない一人だった。とりあえずアラムはもう一つあったプリンをがさごそと鞆の中から取り出してクリスマスに差し出し、向かいの席を勧めた。

「サボりの方だよ。あんな退屈な式出てぼけっとしてるより本でも読んでようと思つて抜け出てきた。クリスマスこそ、どうしたんだ？遅刻なんて珍しいじゃないか？」

渡されたプリンをありがたく頂戴すると、クリスマスもアラムの正面に

腰掛けた。

「それがねえ、色々今晚の準備が忙しくてね。昨日中に終わらなかつたんだ」

「今晚？」

何かあつたか？と疑問符を頭上に沢山並べたアラムにクリスは説明を付け加えた。

「忘れたのかい？今日は城で王子の立太子の礼があるって」

「ああ、そう言えば。ま、唯の一般庶民には関係無い話だけど」

冷ややかに一蹴したアラムに苦笑して、クリスはパクッと一口プリンを頬張った。

「うん、美味しい。流石、君の母上は料理上手だね。このために昨日は家に帰ってたのか？」

「それだけじゃなくて、昨日はうちの地区で雨が降る日だったんだよ。寮に入ってるせいで母さんに一人暮しさせちゃってるし、雨の日はどんだけ人手があっても足りやしねえ」

アラムもクリスと同じようにプリンにはくつくくと片手で本のページをぱらりと捲った。

「毎年城の巡回航路は更新されるけど、それでも国の端っこの方は慢性的な水不足だ。この庭に使われてる水をスラムに持っていきたいところだけど、それも言っても始まんないしな」

「ま、とつと君は上へ駆け上って自分の住んでる地域だけでも助けてやるんだね。結局のところ、城の巡回航路なんてそういう政治の駆け引きのうえに成立してるんだし、僕はそのために君への協力は惜しまないつもりだけど……」

クリスは不自然に言葉を打ちきっていたずらっ子のように笑いながらアラムを見つめた。

「学年末試験はどうだったんだい？式典サボってここに居るって事はもしかして……」

「ああ！ジョゼにまた負けたよ！！」

心底悔しそうに齒軋りするアラムの表情を見て、クリスは笑いを押

し殺すのに失敗した。

「で、また姫に毒でも吐かれたと」

「信じられるか、俺は今回満点だったんだぞ！あの極悪な学年末試験で！なのにあのクソガキは満点取ったどころか魔法陣の構造理論の試験で設問されている以上に考察書いて、しかもそれが先生の研究に一役買ったとかでボーナス点！なあ、俺、そろそろキレて良いよな！？」

身振り手振りを交えて大真面目に訴えかけるアラムを、クリスはのほほんとやり過ごした。

伊達に入学以来丸七年友人をやっているわけではない。ジョゼとアラムと一緒に居合せるという危険領域を何とかしてしまふのは大概クリスの役目だった。そのせいで周囲から異常人物、変人奇人、昼行灯に無神経生物、敵に回せば心強いが味方になつたら恐ろしい、などその他ありとあらゆる称号を欲しいままに与えられてしまふ羽目になってしまったが。

「ま、アラムも頑張つたと思うけど、姫も姫で試験に命賭けてるからねえ。休みの間中、姫は『今度こそアラムに抜かれちゃったかも……』って青ざめてベッドで震えながら泣いててね」

ふう、と溜息をついて頭を振るクリスに対し、アラムは耳を疑った。自分に対してはあの傲岸不遜、自分の我侷が通らないはずがない、天上天下唯我独尊みたいな態度しか向けないあのジョゼが、青ざめて涙！？

「……マジかよ？」

「嘘に決まつてるじゃないか、アラムはホント騙されやすいよね」
さくつと否定されてアラムは体中から力が抜けて机に突っ伏した。その頭上にそこから摘んだ花をお供えしてやりつつ、クリスは独り言のように呟いた。

「ま、姫が試験に命賭けてるのは本当だけどね。姫が御入学遊ばされたときの一族のお歴々との約束はまだまだ全然十分生きてるから、そう言つてクリスはそつと目を閉じ昔のことを思い出した。

『一度でも学年首席を維持できなければ即退学アンドそこの馬鹿なボンボンと即結婚』

それがジョゼが学校へ入学するときの条件だった。

その約束が取り付けられたときの状況を、クリスは今でも鮮明に覚えてる。

ジョゼの家、ブリュイエール家といえは国中で知らない者はない名家だ。

空の城を建造し、国開きの魔導師という称号を与えられた伝説の魔法使いを祖先に持ち、常に王座の左で国と王を守ってきた。

貴族の頂点に立ち、王に次ぐ地位を恣にしてきた一族の、その当主ともなれば揮える権力はいかほどのものか。

そんな家のたつた一人の総領姫として、ジョゼの周りには物心ついて以来毎日のように様々な人間が様々な方法でジョゼに取り入ろうとして取り巻いていたが、幸運なことにジョゼはそのことに思いあがるほどには馬鹿ではなく、不運なことに彼らの目的が自分ではなくブリュイエールという家の名だということに気付くほどには賢かった。

頭の中をドコからドコまで探しても、ジョゼと結婚すれば貴族の頂点は俺様のモノ！という言葉以外出てこない馬鹿な親族の相手をするのには彼女の堪忍袋の緒が切れたのは八年前。

一族の中でも長老、古狸たちが居並ぶそのまん前で、わずか八歳の少女は将来の一族当主になる者　つまりは、皆が考えるところのジョゼの夫の条件として、彼女以上に魔法に長けている者という条件をつきつけた。

国開きの魔導師を祖先に持つブリュイエール家が魔力の弱い者を当主に据えるのは後世に残る家の恥だと訴え、自ら当主としてたつた魔法学校に進学すると主張した少女に対し、一族は仮にもブリュイエールの名を戴く者が魔法学校で主席から落第するのも同じ位の恥だと反論し、そこで協定が結ばれた。

魔法学校に在学中の八年間に、ジョゼが主席から一度でも落ちれば

一族の意見に沿って婿どりをすべし。逆に八年間首席を守り通し晴れて王宮魔導師となる資格を得たならば、ブリュイエル家の家督はジョゼが継ぎ、一族はジョゼに二心無く仕えるべし。

この協定が結ばれたとき、クリスもブリュイエル一族の末席に連なるものとして、また十末年下の少女の婿候補として居合わせた。

以来、丸七年間、ジョゼの傍でブリュイエル一族による執拗な妨害行為や、その全てを薙ぎ倒して我が道を進んでいく彼女を見つづけてきた。

そして、ライバルとして、アラムも。

「全く、あほらしいにも程があるぜ。ブリュイエールの当主、王国の守護神、ンなもん、どうだって良いじゃねーか。てめえらには元々十分な富も権力も水も両手に有り余ってるだろ。更に欲しがる馬鹿は自分で乾いたことの無い能無しだ。銀のスプーン口に啜えて生まれてきた奴等は自分の身の丈以上に潤ったってなんにもならないって事を知らない戯けばかりかよ」

「君も言うねえ、アラム。僕も一応、銀のスプーン啜えて生まれてきた口なんだけど。ま、姫の言い分については可愛い我俣なんだし少しは判ってやってよ」

「クリスは別。あのガキは自分の我俣が他人にどれだけ迷惑か判ってない時点で可愛くない！」

「可愛いもんだって。ブリュイエールの名誉と権力を運んでくれるのだったら人形でも子豚でもそこらに落ちてる石でもなんでも構わないって思ってる人間に『私を見て！』って駄々こねてるだけなんだから。僕には今でも姫が初めて会った三歳のころと変わりなく見えるね」

そう言つてフツと笑ったクリスの微笑みの冷たさにアラムは背筋に冷水を浴びせ掛けられた感じがした。しかし『これ』でもジョゼに最も好意的な親族であることに間違い無い。他の一族の者がジョゼをどのように扱っているのか、想像に余りある。

だが、アラムも人のことに同情している余地は無かった。 クリスがそれまでの空気を振り払うようににっこりとアラムに微笑みかけてくる。

「それよりアラム、今年こそ頑張つてね。一族の小父様方は今のところ君のことを姫を主席から叩き落せそうな唯一の人間として好意的に見ているけれど、そろそろ本当に主席取らないと小父様方に恨まれちゃうよ。姫をこのまま主席で卒業させようものなら、小娘一人負かすことの出来ない腑抜けって評価されて目の仇にされちゃうかもしれないし。権力と人脈だけは余りある小父様方のことだから逆恨みで君の将来スタボロにしちゃうくらいやりかねないからね」何気なくを装ったクリスの言葉に、アラムは盛大にプリンを吹き出しかけた。

冗談じゃない。国を牛耳るブリュイエル一族に本気で睨まれたりしたら三日でこの世とサヨナラしたくなる目に遭わされるに違いない。

「……なあ、『まだ』逆恨みはされてないんだよな？」

「うん。一昨日のパーティーでの感じではね。でも頑張つてね、うちの一族、言っちゃなんだけど欲得からみは異常なほどの行動力を示すから」

うっげえ、とうめき声を上げて撃沈したアラムの頭のその向こう、回廊の入り口に一体何を見たのかクリスは突然たちあがり、そして指をばちんとはじくと自分の金の髪を縛っていたリボンの色を紺色から深緑色へと変化させた。

一連の動きを突っ伏したまま感知したアラムは、しゅしゅと起き上がった。

この動作をクリスが行うときは、お決まりの如くあの儀式が始まるのだ。

アラムの視界の隅で小走りに走っていったクリスが跪き、その向こうに彼が今変えたばかりの色と同じ色のリボンをつけた金の髪の少女が居るのが見えた。

「おお姫、お久しゅうございます、姫の第一の下僕にして最も従順なる奴隷、クリステイ・セドリック・セバルカンテイ、ただ今御前に参上いたしました！」

朗々とした声を張り上げ、回廊中に口上を響かせたクリス　　ジヨ
ぜさえ関わらなければ全くもって普通の人間に分類できるのに、少女が関わった瞬間何もかもを投げ捨てて彼は彼女専用の吟遊詩人と化す。

その変貌振りは猫を被るとか性格が変わる、などと言う言葉では生温い、絶対に人間が交代しているに違い無いという評判すら立てられるほど。

「ああ、本日の姫は何時にも増してお美しい！私がお傍を離れていた間に一体何事があったのか！いやそれを詮索するのは奴隷の身にはおこがましいこと、大変失礼をいたしました。それよりも今朝はお迎えに上がれなかったことをまずはお詫び申し上げねば！私としましたことが姫の大切な日にお迎えに上がれなかったとは何たる不覚、あまりの事態に絶望し衝撃のあまり自らの涙で溺れ死ぬところではございましたがこうやって恥を偲んでまいりました。姫、どうかこのクリスめに折檻をお与え下さいませ！」

「けっこうよ。それにクリスに何時もお迎えに来てと頼んだ覚えはないわ」

ジヨゼがきっぱりと言いきると「そうでしたこのクリスが勝手に姫の御前に馳せ参じていただけのことですのに更に姫に叱責戴こうとは何たる傲慢！」とまた怒涛の如く語り出すクリスをその場に置いておいて歩き出したジヨゼはすぐ先にアラムがいるのに気がついた。「あら、アラム、貴方こんなところに居たの？もしかして私に負けたのが悔しくてこんなところで式をサボってたのかしら？」

無邪気に凶星を指されて、アラムは眉間のしわを一層深くしながらプリンを大きく掬いとして口に運んだ。途端、ジヨゼの目が好奇心に輝いた。

「あら、何を食べてるの？なんだかクレームブリュレに似てるけど

ちよつと違つわね」

「姫、それはプリンと言うものでございます」

いつのまにか置き去り状態から復活したクリスがジヨゼの真横に現れて質問に答えると、ジヨゼが傍目にも判るほど興奮した面持ちでプリンを凝視した。

「プリン！？私知ってるわ！うちのシェフが教えてくれたの、庶民版のクレームブリュレでしょ？生クリームと卵黄から作る濃厚な生地にパリパリの薄い飴で表面をコーティングしたブリュレと違って庶民にも馴染みやすいようカaramel化する手間暇省いてカaramelソースで代用、使わない筈の卵白を勿体無いからって増量のために利用して、材料費を押さえるために高い生クリームを牛乳に代えた庶民の悲しい努力がここぞとばかりに味わえる一品よね！？」

「さもしい庶民の血と汗と涙の結晶レシピで悪かつたな！！」

庶民出身のアラムが一瞬で沸点に達して食って掛かるうとするのを気にも止めずに、ジヨゼはあくまで自分の欲望に忠実に行動した。

「ねえアラム、お行儀の悪いことだと思うかもしれないけど、貴方のその食べかけのプリン一口ご相伴にあずかっても構わないかしら？だってこんなこと滅多に無いんだもの」

こんなこと即ち庶民の食べ物に口を口にすることだと言うことに気付いたアラムがもう一度怒鳴ろうと息を吸い込んだ絶妙な間隙に、クリスがすつとジヨゼの目の前に自分の食べかけのプリンを差し出した。

「ああ、姫、私のでよろしければこちらをどうぞ存分に味わってください！」

「まあ、構わないの？」

「もちろんですとも、このクリス、かようなことでしか姫のお役に立てないこの身が恨めしゅうございます」

立て板に水を流すかのごとくとめどなく言葉を紡ぎつづけるクリスに完全に毒気を抜かれて、アラムはへなへなと椅子に戻るとまた本を読み始めた。

その隣で貴族二人の社会体験の如き時間が流れていく。

「あら、これ美味しい。クレームブリュレは表面の飴を割ながら食べるのが面白いのだけれど、プリンを食べた後じゃせっかくのあの滑らかな舌触りを殺してしまっているように感じてしまうわね。それにこの触感も面白いわ。ブリュレと全然違うの。私こちらの方が好きかも。今度料理長に作るように頼んでみようかしら」

やめておけ、格式ある料理を作ることに人生かけてきた料理人が聞いたらまず間違い無く世を憐んでしまっぞ、と心の中で突っ込んだアラムの耳に、頭上から降り注ぐ鐘の音が容赦無く襲いかかってきた。

「やっべ、予鈴だ」

「大変！ホームルーム！」

慌てて三人でテーブルの上を片付け、アラムはさっと本を取り上げて席を立った。

「行くぞ、これから爺さんたちのありがたい説教教室で聞かされるんだろ？」

「だね。では、姫、参りましょうか」

クリスはジョゼに手を差し出してさりげなくエスコートしつつ、アラムとの間に割って入った。これぞ学内の平和維持活動の地道な第一歩。

「爺さんたち、今日の説教なんだって？」

「卒業論文のことじゃないかな？最終学年の初日だし。アラムはテーマは決めてるのかい？」

「ああ」

クリスが微笑んで話を向けると、アラムはちょっと鼻をこすりながら明後日の方向を向いた。

「魔術の医療技術転用について、かな。魔道具を人体内に埋め込んで人体の一部として代用とかできれば、もしかしたら母さんの身体も良くなるかもしれない」

「まあ壮大な目標ね」

クリスの逆側でふん、と鼻を鳴らす気配がした。

「王宮魔道師が何人も何年もかけてまだ進展してない難しい研究だもの、結果が出なくても落ち込まないようにね」

「何だよその結果が出ないに決まってるって決め付けた態度は！」

「まあまあ、アラム」

つんと顔を背けたジョゼに食ってかかろうとするアラムを押し留めて、今度はジョゼの方を向いた。

「姫は何かご希望などはあるのですか？」

「私？私は……雨、かしら」

『雨！？』

クリスとアラムがぎよつとした風に同時にジョゼの顔を覗き込んだ。「おいおい、正気かよ？それこそ千年も解決できてない難問だぞ？」

「分かってる、だけど今の状況だと辺境部じゃ水が足りなくて困るところもあるんでしょ？必要な時、必要な所に、必要な量だけ城に頼らず雨を降らせられたら、皆嬉しいじゃない？」

ジョゼはむつととして頬を膨らませながら視線を下に向けた。

難しい問題なのは判っている。史上最高の魔道師といわれる自分の先祖筆頭に歴代の名のある魔道師たちに真つ向勝負を挑むようなものなのだから。

それでも、ジョゼの脳裏を離れないものがある。

かつてたった一度だけ、アラムの家を訪ねたときの光景。

そこはジョゼの家の何処にも無いほど、……それこそ、使用人棟よりも質素で簡素で、有体に言えばボロい家が立ち並ぶスラム街で、人々は城が巡ってくるたびに水を確保しようとする雨の中をずぶ濡れになって走り回っていた。

水なんて、放っておいても集水システムが勝手に貯蓄してくれるものだと思っていた。

後でレイに聞いたところ、そんな事は庶民の間では極当然のことなのだという。

庶民でも裕福なところは共同で集水システムを共有して手間を省い

ているが、大半の民草は生きていくのにかつかつの量を何とか確保している、と。

長い歴史の中少しでも生存可能領域を広げようと度重なる城の軌道修正の積み重ねの矛盾が全てヒエラルキーの最下層に存する人々に降り注がれているように思えて仕方がなかった。

自分の先祖が構築した降雨システム。そのせいもあるのかもしれないけれど、何とかできないのか、ともう何年も一人で考えていて。

「ずっと、卒業研究には雨をテーマにするって決めてたのよ、私」

「流石は姫！壮大にして遠大、且つ民の為を想った崇高なお志、なんと云うお優しい御心！私の心は今、感動の嵐にうち震えております！」

クリスが大袈裟に感激する横で、アラムはふん、と鼻を鳴らした。

「お前のほうこそ、それこそ出来んのかって感じだぞ？」

「やって見せるわよ！これは、私の、御先祖様への挑戦でもあるんだから！！」

「精々頑張れよ。ま、お子様の宿題程度じゃ絶対に解決できないレベルだからそれこそ結果でなくても落ち込むなよ」

「アラム！また私のことをお子様って言ったわね！？訂正しなさい！」

ぶんすか怒るジョゼのご機嫌をとりつつ、クリスたちは今年一年間根城にする新しい教室に入って、新しい学年のスタートを切った。

夜空にぽっかりと浮かぶ三日月。その隣に寄り添うように輝く淡い空の城。

まるで御伽噺の挿絵のような光景のその中では、今まさに御伽噺のように煌びやかに王子の立太子式と、それを祝う舞踏会が行われているのだろう。

だが、そんなことは今地上のお屋敷の一角でカリカリとペンを走らせるジヨゼには全く関係のないことだった。

「よつて、本式により求められる命題の構造式が成立することが証明された、と。日に日にレイの出す問題が極悪になっていつてる気がするわ」

ジヨゼはインクの跡も鮮やかに紙一杯に文字を記し終わると、机から顔を上げた。

ジヨゼの日課の一つに、レイがよこす問題を解くことがある。

ブリュイエル家の数居る使用人の一人に過ぎないレイだが、ジヨゼの物心ついて以来『お嬢様』の魔法教育を一手に引き受けていた。その能力の優秀さは生徒であるジヨゼが王立魔法学校で主席を死守していることから窺える。だが……

「私は、魔法学校の最高学年の主席よ？あの学校で一番優秀な生徒なのよ？なのにどうしてレイは私にも手におえないような問題出しつづけられるのよ？」

最近の問題の難解さにジヨゼが小さく毒づいた。そりゃ、この間の試験は危うくアラムと満点で同点一位となってしまうって一族の狸爺どもに難癖つけられて退学させられかねなかったところをレイが何時も出してくれる問題のおかげでボーナス点をもらいなんとか回避できたが、それとこれとは話が別だ。はっきり言ってレイの能力は不可解且つ理不尽、ていうかありえない。

「人を不審な物体のように言うの止めていただけませんか？」
何時の間にか、手に夜食を持ったレイがジヨゼの部屋の入り口に控えていた。

「どうやらジヨゼの脳内の眩きが外にただ漏れになっていたらしい。なんとという恐ろしいことをしでかしたのか。背中に冷や汗をかきつつとりあえず長年の勘で流す方向に舵をとってみた。」

「あら、そんなに悪い風に言った覚えは無いわ。ただ、レイはこんなに優秀なのに、どうして王宮に上がらずにうちで使用人なんかに収まってるのかと思ったのよ」

「私の能力を評価していただけたのは嬉しいですが、お嬢様、私昔にちゃんと教えましたよね、力の強い魔法使いの条件を」

「冷やかな視線を投げかけつつけるレイの問いかけに、ジヨゼは小さく頷いた。」

「強大な力を有する魔法使いの条件、それは……」

「高い潜在能力、明晰な頭脳、そして強い意志の力、よね」

「その通りです。自らに備わる魔法の力を十分に発揮するために必要な、複雑な魔法体系を理解する知性と、暴走しようとする力を押しとどめる理性の手綱。どれひとつとして欠かすことの出来ないものです。確かに私は潜在能力だけなら十年に一度の逸材と期待されましたし、魔法体系に関しては現在存命のどの魔法使いよりも深く理解している自信がありますが、如何せん意志の力が足りなかったのですよ。面倒事が大嫌いで、易きに流れるこの性格。我ながら、大きな魔法を揮うには適性ゼロの自信があります」

「自信満々に自慢にならないことを言いきったレイから視線をはずしてジヨゼはレイの持ってきた夜食にぱくついた。」

「レイは何時もこうだ。たとえ大きな魔法を使うことが無理でも魔法解析などの研究分野では引く手数多、最高峰の研究者となりうる能力を有しているのに、それをあっけなく放り出してたかが使用人風情に落ちついた。理由は、一々どうしようか考えて研究しなきゃいけない学者よりも何をしたら良いのか大体決まってる使用人のほう」

が面倒くさくなくて楽だから。

おかげでブリュイエル家は当代最高の家庭教師を手に入れることに成功したが、レイを指導したことのある教授たちは今でも時折ジヨゼに愚痴をこぼすほどだ。

「ああそうそう、レイ。私、卒業論文の課題、雨の研究に決めたら」

ジヨゼが淡々と宣言すると、レイはあからさまに顔を顰めた。

「……何よ、何か文句でもあるの？」

「いえ別に。ただ、面倒なことになりそうだな、と」

「何故？私の研究課題がなんであろうとレイには関係ないでしょう？」

「関係大有りです。せっかくあの学校を出てのびのびしていたのに、お嬢様の研究の指導教官として近日中に魔法学校に緊急召還されるが予想されます。ええ、絶対」

「レイが私の指導教官役？そんなのいやよゼツタイ！家でも学校でも息抜きできなくなっちゃうじゃない！！」

「その分野の研究者は余り居ないんですよ。城と雨の研究は国の根幹に関わる分野。研究対象が城そのものである以上、下手な者に研究させて何かとんでもない間違いを犯されるわけにはいきません。ですから、城の研究は王宮からの許可制になります。今存命の魔導師の中でその許可を得ているのはわずか数名。殆どよぼよぼの老いぼれ爺ですからね。お嬢様を口実にこれ幸いと引きずりもどされるのが目に見えています」

はあ、とひととき大きく溜息をつくるとレイはジヨゼに嘆かわしげな目線を送った。

「やっと面倒事から逃げ出したと思ったのに、そんな課題を決めてくるとは一体どこでお嬢様の育て方を間違えたのか。恨むべくは過去の私ですかね」

「失礼ね！人を失敗作のように言うのは止めて！！」

きいいいいっ！と齒軋りしてジヨゼが反論した、その時。

この屋敷にしては珍しく、メイドとして厳しくしつけられている人間ばかりなので本当に珍しく、どたばたと走る音がして荒々しくジョゼの部屋の扉がノックされた。

「お嬢様、今すぐお召し替えを！ラ＝コット侯爵、セバルカンティ伯爵他数名の方がお嬢様に今すぐお会いしたいと……！」

「小父様たちが？こんな時間に？」

訝しげに首をかしげてレイを見ると、彼も彼で肩を竦めてみせた。心当たりは無いらしい。

今名のあがった人間はどれもこれも一族の中でも長老だとか重鎮だとかいう言葉が似合う種類の人間だ。今日も今日とて城で行われている祝宴にも出席中だったはず。

なのに、その大事な宴を中座してまでジョゼに会いに来るだなんて、一体何事があったというのだろうか？

「……まあ良いわ、会えばわかるもの」

そう、一つ大きく溜息をついてジョゼは着替えるからとレイを部屋の外へと追い出した。

細やかな彫金の細工の施された白い大きな扉の前で、ジョゼは一つ大きな深呼吸をした。

扉の向こう側は夜も更けてから突然現れるという非礼を悪びれることなくやってのけた一族の長老の皆様方が揃う応接間。そこから間断なく無遠慮にデカい笑い声が轟いてくる。……つまりは、完全にできあがってるジジイども多数。

腹に力をこめて無理やりに笑顔を作ると、ジョゼは一気に扉を開け放った。

「こんばんは、小父様方。こんな夜遅くに急に訪ねてこられるなんて、一体どうなさったの？」

予定の言葉を述べて首を傾げつつ可愛らしさを残したあどけない表情を三秒キープ。耐えて、耐えて、耐えて、そして。

「おお、私の可愛いジョゼフィーヌ！もっとよくその可愛らしい顔

を私に見せておくれ」

一番でつぷりと太り、赤ら顔具合もぶつち切りで一番のラ「コット侯爵がジョゼに近づいて肩を抱いた。顔にかかる息が酒くさくって思わず眉を顰めそうになる。

(耐えるのよ、ジョゼファイヌ！毎日アラムの前でだってなんとか笑顔作るじゃない！)

ぐつとこぶしを固く握り締め、その痛みでなんとか理性を引きとめた。

『私の可愛いジョゼファイヌ』ではなく『私(に富と栄光を運んでくれる)可愛い(お人形にしか過ぎない)ジョゼファイヌ』の言い間違いでしょ？と内心で毒を吐きながらラ「コット侯爵以下ブリュイエル家の親族の重鎮たちのお世辞を聞き流す。

「いやあ相変わらずの愛らしさ！見よ、頬など本物の薔薇の方が己を恥じて萎れそうだ」

「全く！これならば王子もお気に召そうぞー！」

「そうだな、これほどまでに可憐な姫君は社交界には居るまいて」

「あ、ありがとうございます、小父様」

持てる力の全てを発揮して、ジョゼは儂い笑顔を浮かべた『私の可愛いジョゼファイヌ』でありつつけようとした。

自分の見たいものしか見ようとしないうこの人達にわざわざ理想と違うことをつきつけたところで結局は面倒くさいことになって時間の無駄にしかない。なら、目的が全然わからないけれどとっと満足してもらってとっと帰ってもらおう。

ああでも、クリスが居たら小父様たちの相手も少しは楽になったのに！

「そういえば、クリスの姿が見えませんが……今日はクリスも城に上がったのでしょうか？」

「クリスは大手柄じゃ！今頃王子に気に入られておるわ！」

「あれもほんに如才ない。どうやって王子の気を引いたかは知らんが、社交界に出たばかりの王子が真つ先にあのクリスと話したいと

言い出すとは」

「事の次第はようわからんが、これで次代の王家とブリュイエールの絆も深まったというもの。後は……」

くすくすと顔を見合わせながら忍び笑いをする長老とその予備軍たち。にたにた笑いがこれほどムカつくものだったことを改めて思い知る結果になった。自分で自分を苛立たせていては意味が無い。ジヨゼはクリスに話を向けた自分の失敗を認めた。

かくなる上は……

「それで、一体何の用があつてこんな夜更けにいらつしやつたんですか？他に話もないなら、私明日も学校がありますので失礼します」一瞬たりとも同じ空気を吸いたくない、と強引に話をまとめる方向に仕向けたジヨゼを、押しかけた客たちは年の功でやんわりと宥めて引きとめる。

「そう急いで将来婿殿に呆れられてしまつぞ」

「そうそう、女に生まれたからには何時もにこやかにして家中を明るく……」

「小父様方、私眠いので失礼いたします」

「いやいやいやいや、話はまだまだこれから、せつかく私の可愛いジヨゼフィー又の良い話を持つてきたのだから」

ウダウダ食い下がる小父様方に痺れを切らしてきびすを返しかけたジヨゼに慌ててラコット侯爵が追いつがった。

それにしても良い話ですつて？何の冗談よ？とジヨゼは侯爵の言葉を鼻で笑い飛ばした。

物心がついてこの方、侯爵以下雁首そろえた親族たちから良い話を聞いたことなど絶対ない。

「なんですか？それは今すぐ小父様方が私をブリュイエル家の正当なる後継者として認めてくださるということでしょうか？」

「いやいや、その話はまた別の機会もあるうて。何せまだ一年猶予がある。それよりも、私の可愛いジヨゼフィー又ももう十六歳。そろそろ社交界にデビューしても良い頃合ではないか？」

ラッコット侯爵から飛び出してきた単語に、ジョゼの眉が跳ね上がった。

社交界？今年一年卒業研究に忙しいというのに、貴婦人たちの間に混ざって詩歌音曲に心血注ぐようなそんな余裕がある筈無い！あつたら勉強する！！

あれか？あれだ！ジョゼに対するいつもの主席奪取妨害工作だ！

「お断りします。私今年忙しいんです」

一瞬でジョゼは答えをはじき出し、にべもなく断った。

だが、そのくらいのことではじき出せるようなお優しい小父様方であるはずもなく。

急に、物分りの良さげな大人の風情になり、分らず屋の若者を諭す空気に雪崩れ込む。

「残念だがそれは許されんことだぞ、ジョゼフィーヌ」

「そうそう、今宵宴で小耳に挟んだのだが、ジョゼフィーヌよりもお若いマルグリッド王女殿下がもうじき社交界にデビューなさるそうだ」

「王女殿下は国王陛下にとって掌中の珠、目に入れても痛くないほどの可愛がりようと聞く」

「それにデビューに際し余計な虫がつくのを嫌って王太子殿下がエスコートを任されたとか」

「それほど大事にされておる姫君じゃからのう、交友関係にも厳しいのは当然じゃな」

「身元もしつかりした、間違いない立派な貴婦人で、王女殿下と年も近く才気煥発にして王女自身もないがしろに出来ない姫と言えればジョゼフィーヌを置いて他にはおらんではないか」

「姉の如く王女に接し清く正しく導いてくれとは国王陛下のお言葉じゃ」

一族の長老達に唯々諾々と従うことをよしとせず反乱を起こしている真つ最中のジョゼが王女を『清く正しく』導く役目につくのが本当に正しい選択かどうかはこの際とても疑問ではあるが、国王

陛下のたつての希望ならばジヨゼに断る権限はない。これぞ完璧なるお膳立て。

ああ、これが今年最初の妨害工作だというのなら、受けて立とうじやないか。きつと立派に社交界と学業を両立させてみせる！

「そこまで望まれたのでしたら寧ろ望外の喜びですわ。是非、王女殿下の社交界デビューの場に居合わせたいものです」

にっこり微笑む仮面の下で、ジヨゼはぎゅっとこぶしを握り締めた。

「ムっカっつっくうううううう！！！」

ジヨゼの雄叫びのような叫びとともに暴走した魔力がどこかの研究室で研究中だった魔法薬の実験にでも共鳴したのか、微かに爆発音と、ガラスの飛び散る音、そして居合わせた学生らの悲鳴が聞こえてくるが、そんなことは気にしない。

なんたつてこつちは人生の一大事だ。

「なんだつてこんな大事な年に社交界なのよ！後一年逃げ切れればいくらでも付きあつてあげるのに、どうしてこのタイミングなのよ！邪魔邪魔、研究の邪魔だわ！！！」

ドン、ダン、ガシャーン！とジヨゼの吼え声に合わせてそこから中で何かの破壊音がする。そう、例えば黒板がへこんだ音だったり、教卓の天板が真つ二つに折れた音だったり、天井の釣りランプが落下した音だったり。

ジヨゼの居る八年生の教室は結構悲惨な光景になっていたが、アラムはその状況を気にすることなくべらりと昨日から読みふけている本を捲り、ついでに呟く。

「一々そんなことで目くじら立てるなよ。どうせ一晩不恰好に着飾つてくるくる回つて愛想笑い浮かべてるだけだろ。それくらいのことにも付き合つてやれないくらい度量が狭いとは……まったく、これだからお子様って奴は……」

「アラムったら！！貴方また私のこと子供扱いして！！！」

きい！とアラムを怒鳴りつけた瞬間、ジヨゼの真後ろで教室の

窓ガラス全てがバリバリバリ！！と悲鳴を上げて粉々に砕け散った。

「馬鹿が。まだ肌寒い時期だって言うのに、何てことしやがる。だからガキだつての」

アラムから冷静な突っ込みが入って、ジョゼはハツとして周りを見まわした。

存在意味の無くなった窓の残骸、約八割が使用不能に陥った黒板、エトセトラ、エトセトラ。とりあえずこのままでは授業は不可能だろう。

外から吹き込む風が、心なしかいつもよりも冷たく感じる。

「まあまあ、アラム、この位姫の魔法ですぐに直せるんだからそこまでトドメ刺さなくても」

「お前がそうやって甘やかすから何時まで経っても周りの状況見れない、自分で自分もコントロールできないクソ餓鬼様に育つんだろ？直せば幾らでも壊しても良いってか？」

静かにキレルアラムを宥めるのにクリスは見事に失敗した。

にへら、と笑って、いやでも、直さないよりマシだね、というフオローになつてゐるのかなつてないのか判らないクリスの援護射撃を受けると、寧ろ追撃を食らったかのような精神的ダメージを味わって、ジョゼは更にいたたまれなくなった。

小父様たちの申し出がどんなに不愉快だったからって、魔力を暴発させて物に八つ当たりするだなんて、アラムに餓鬼と言われても仕方が無い。そんなのもう卒業したつもりだったのに。

むっつり黙々と物体修復の魔法陣を編み出しつづけるジョゼを尻目に、アラムは最後のページまで読み終わると前に座っていたクリスに話しかけた。

「で、本当にあんなジャリガキがマルグリッド殿下の指南役になるのか？逆じゃね？」

言外に、むしろあからさまに立場が逆だろうと言う空気にクリスは苦笑して頭を振った。

「ま、国王陛下のお心積もりでは、そういうことになるかな」

「買い被り過ぎだ。あいつに殿下の指南役？ 傍若無人の傍迷惑以外教えられるものはない！」

否定しようの無い事実をぐっさり指摘されても、ジヨゼは反論することなく大人しく魔法で自分の壊した教室を修理するための魔法陣を編みつつける。

その横で、アラムはコホンと前置きをしておもむろに親友に話を切り出した。

「で、クリスは王女殿下に会ったことあるのか？ やっぱことう華奢で儂くてお姫様〜って感じ？」

「あれ、そんなに興味持つなんてどういう宗旨変えかい？ アラムは貴族が嫌いじゃ無かったっけ？ 君のことだから貴族も王族も変わらないと言っに違いないと思ってただけだね」

目をきらきらさせて聞いてくるアラムにクリスが冷やかし気味に茶化すと、アラムは断然力を込めて断言した。

「俺だつてこれでも人並みに王族に対する敬意ってやつは持つてるんだぜ。なんてつたつて王様が居なかつたらこの国が出来なかつたんだからな」

「僕や姫のご先祖様が居なくつても国は出来てないけどな」

「そうは言ってもやつぱり、思いつく人間が居なきゃ何も出来ないじゃないか。そう言う意味で王はまさにこの国を生み出した人だよ。この国のもっとも重要な人だろ？ その王位を継ぐ、かもしれない王女殿下、クリス会ったことあるのか！？」

「そんなに期待されてるところ悪いんだけど、僕はまだ会ったことはないよ」

意気込むあまり額がくっつきそうなほど迫ってきたアラムの鼻の頭に指をつきつけてクリスが肩をすくめて答えると、何だ使えねえ、とアラムが毒づいてまた元のだらけた姿勢に戻る。

「なんだ、ブリュイエールの一族の人間と言つてもそんなに偉くないんだな」

「違うよ。僕は確かにブリュイエールの末席に引つかかる程度の傍流だけど、たとえ本家当主、姫のお父上でもまだお会いしたことないと思うよ。王女殿下はまだ成人前の雛であらせられるからね。王太子殿下だつてこの間の立太子式まで一度も奥宮を出られたことは無かつた筈だし」

「……やっぱ王族ともなると面倒なことが多いのか？」

「多分ね。王族はとても血が弱いから。知ってる？長い歴史のなかで王冠を継ぐ子供は一人しか無事に成長しないっていう伝説があるんだよ。残っている記録を見る限り確かに現在の国王陛下の代までは真実だし、その分周りが過敏になるのも当然、かな」

「なんだそりゃ？やっぱこう、陰謀権術、とか泥沼王位争い、とか？」

「どうかな、殆どが死産或いは夭折だし、多分に医療技術のことも関係あると思うしね」

簡潔に過ぎる感のあるクリスの説明に成る程とアラムが頷く後ろで、ジヨゼが一声吼えた。

「どうも、申し訳ございませんでしたあああああああ！！」

……なんとも締まらない謝罪の叫び声と共に、ずっとちまちま練り上げていた魔術構成に怒涛の如く魔力が注ぎ込まれる。魔力の満ちたところから光が溢れ、見る見るうちに時間が巻戻るように壊れていた物があるべき場所へと舞いあがってゆく。

「ふう、イイ仕事をしたわ」

額の汗をぬぐう振りをしつつ一息ついたジヨゼの背後に、亡霊のような影がさす。

「……おいコラそこのクソ餓鬼」

「どう、アラム、私の華麗なる魔法で生まれ変わった新しい教室は？」

「『どう？』じゃないだろ！真性の阿呆がお前は！！」

アラムは怒鳴ると同時に手近にあったノートで殴りつけた。

「元の教室じゃないだろ！こんなキラッキラなところで勉強できる

かボケ！」

思いつき握り締めたこぶしを机に叩きつけてアラムは周囲の被害状況を指差した。

ジヨゼの魔力の暴走で木っ端微塵に吹っ飛んだ窓はガラスが嵌め込まれると同時に優美な唐草模様が絡んだ真鍮の補強枠があてがわれ、ほぼ壊滅状態に追い込まれた黒板はあらゆるところに銀装飾の女神像があしらわれる。天板真つ二つで意味の無くなった教卓はいかにも鋸有り合わせで切って作りましたという直線直角一本槍のデザインから職人技を思わせる上品な曲線を描く猫足テーブルに姿を変え、明かりさえ取ればいいという意思がひしひしと伝わってくるような大量生産工業品の代表格のようなランプは水晶を磨いたようなクリスタル製のシャンデリアに取って代わられていた。

壊した物を元に戻すくらい簡単なのに、何に時間をかけているかと思つたら！

「いいじゃない、常々魔法学校つて飾りに欠けると思つてたのよね。美しい物に囲まれて精神的に豊かな生活を送ることは勉学をより深くするために必要なことだと思つたのよ」

怒りの余り二の句がつけずにプルプル震えるアラムの横を小走りに駆け抜けて、クリス、もといジヨゼの奴隷が彼女の前に跪く。

「ああ、姫、私も何時もそのように感じておりました！なんとなれば潤い少ない学究生活に一輪の華を添えるのは我等持てるものの定め。持たざるものにあるべき理想の生き方の薰陶をくれてやる姫のお優しき計らいに私魂が打ち据えられるほどの衝撃を受けました！斯くなる上は私も姫を見習い学院内の美化に勤める所存……」

「やめんかこの金持ち貴族どもが！」
とうとうと語りつづけるクリスを蹴倒して、アラムは深い深い溜息をついた。

「お前等無の美という物を知らないのか！？一切の無駄を排除した機能美と単純構成の反復が生み出す美しさを理解しないから貴族どもは無駄にゴテゴテ飾り立てて醜くなつていくんだ！今からジヨゼ

の社交界デビューの滑稽な姿が思い浮かぶぜ！」

「滑稽ですって！見ても無いのにそんなことを言うだなんて、根拠のない事柄を断定口調で話す人間は愚か者の極地よ！ねえ、クリスからも何か言つてよ！私酷い格好してないわよね？」

「それはもう、姫の美しさは私の魂を捕らえて離しません！」

陶醉した目で答えたクリスを受けて、ジヨゼはふん、と鼻を鳴らし、アラムを振りかえつた。

「どうよ、何度も私の正装見てるクリスの意見は？」

「証言能力あるか！クリスはお前のこと何時も常に全肯定だろうが……！」

アラムに事実を指摘されてジヨゼはうつと言葉に詰まった。

いや、確かにそれはそうなんだけど……

「じゃあ、社交界デビューのときにはアラムにも私の格好見せてあげるわよ！」

「おうおう、見せる見せる、指差して笑ってやるから！」

火花が飛び散りそうなほど睨み合う二人を、クリスはすうっと目を細めて眺めていた。

新学期早々、全く姿を見せなくなったジヨゼに対して、アラムは心底いらついていた。

あの小娘は、八年生の教室をキンキラキンに飾り立てたまま、雨だなんて壮大なテーマを研究目標に選んでおいて、これほどまでにさぼり倒すとは！全く正気の沙汰とは思えない。

ジヨゼが新学年になって登校したのはたったの三日。本気で救いよりの無い阿呆だと思う。

その怒りをいつもぶつけていたクリスも今日は欠席だった。

何故なら今日はあのクソガキが社交界デビューで、ジヨゼは勿論何週間もの間準備に忙殺され、エスコート役を買って出たクリスも今日だけは一日がかりで支度を余儀なくされている。

全く、貴族つてやつはどこまでも無駄なことばかりだ。

憤然としながらアラムはお気に入りの中庭の回廊の一角で午後ずっと読書に没頭しようとしていたのに、消化しきれない怒りがアラムの頭に靄をかけ、読んだ字面の大半が意味をなさずにアラムの中を通りすぎていく。

と、ふいに。

「あれ、アラム？今日はずっと読書してたのかい？」

聞き慣れた、ここにあるはずのない声を聞いて、アラムははっとして顔をあげた。

「ク、クリス！？」

目の前にこれ以上飾る場所はないと言うほど煌びやかな格好をしたクリスが立っていて、アラムは思わず目を疑った。

「どうしたんだよ、今日はジヨゼの相手で休みなんじゃ……？」

「だからここで待ち合わせなんだ。約束したじゃないか、姫が社交界デビューに着飾った格好アラムに見せるっ……て……、」

不意にクリスの声が途絶えた。

そのことをいぶかしんでアラムが首を傾げると同時に、軽やかな足音が聞こえてきた。

「クリスマス！」

あるはずのない声その二の持ち主ことジョゼの声に反応して振り返ったアラムもまた、クリスマスと同様に固まった。

いつもは野暮ったい黒のローブ姿なのに、今日は体の曲線を強調するような艶やかに光る極上の絹の礼服を身に纏い、レースのように細かい銀細工の簪を挿したジョゼが立っていた。

「待たせてごめんなさい、クリスマス！着つけるのに時間がかかったやつて！」

薄紅色に彩られた愛らしい唇から紡ぎ出される音すらもいつもとは違った色を持っている気がして。

アラムは急に動悸が早くなるのを感じて自分で自分に心底驚いた。

子供だとばかり思っていたのに。

自分は一体今まで何を見ていたのだろうか？何も見えていなかったのか。

いつもと違って黙り込んでしまった二人にジョゼが小さく首を傾げると、しゃらん、と銀細工の装飾品が涼やかな音を立てた。

「何か変かしら？どこかおかしい？レイは綺麗に出来たって誉めてくれたんだけど……」

不自然に黙りこんでいる友人二人にジョゼはだんだんと不安を隠せなくなってくる。

やっぱり、アラムが言っていたようにゴテゴテしすぎて道化のようになっているのだろうか。

が、先に復活したのはクリスマスだった。

「ああ、姫！不安にさせて申し訳ございません！無躰ながらこのクリスマス、薔薇の花束すらも霞んでしまいそうな姫の美しさに我を忘れておりました！君もそうだろ、アラム？」

急にクリスマスに話を振られて、おっかなびっくり、アラムも曖昧に頷いた。

途端、曇っていたジヨゼの顔が晴れて、ぱああつと輝く。

「良かった、アラムにそう言って貰えると嬉しいわ！クリスはいつもお世辞ばかりだけど、アラムは絶対に嘘は言わないもの。これで私自信持って夜会に行けるわ！」

無邪気に向けられる純粹な信頼が、アラムの心を一層ざわつかせる。

ふつと視線をはずしたアラムとは対照的に、クリスはさつと手をさしのべた。

「では、参りましょうか、姫？」

「そうね、もうそろそろ時間だもの。じゃ、またね、アラム」

一对の人形のような二人が立ち去った後、一人取り残されたアラムはふと自分の黒一色の飾りけのまったくないローブ姿を見回した。「貴族と庶民、か」

アラムは溜息をついて本を閉じると、夕暮れ迫る廊下をジヨゼたちが去った方向とは反対方向に歩き出した。

闇の衣が降り始めた虚空に浮かぶ、荘厳と華麗が淡い色彩を伴い具現化したかの如き空の城。

そこに行く為の手段は数えるほどしかない。

例えば、魔法学校の奥の奥。もっとも静謐な裏庭の片隅には六本の円柱に囲まれた小さな石の円舞台がある。

この小さな台が空に浮かぶ城の正式な入り口だった。

この転移ゲートを介して以外の城への侵入は堅く魔法障壁で鎖されている。

そのゲートも滅多なところには作られず、魔法学校などの主要な公的機関及びジヨゼの家のような大貴族の屋敷内のみ限定されていた。

そのような台座のひとつにクリスとジヨゼが手に手を取り合って立つと、床が光を放ち、虚空に紋様を描き出し、そして。

一拍のち、突然二人の周りの風景が紙芝居の場面転換のように入

れ替わって、二人は一瞬で空の城に到着した。その姿を確認し、転移ゲートのそばで控えていた侍従が声を張り上げる。

「ラ・ブリュイエル公爵家ジョゼフィーヌ様、並びにセバルカンティ伯爵家クリステイ様、ご到着！」

侍従の紹介が終わるか終わらないかのうちから居遭わせた男女が漏れ無くジョゼを振り返る。

「あれがブリュイエールの長姫？」

「まあ、なんとお可愛らしい……」

並々ならぬ好奇心に満ちた視線と溜め息の波が連鎖的に伝わっていくのを尻目に、クリスはジョゼに手をさしのべた。

「では、準備はよろしいですか？」

「当然」

女王の貫禄すら漂わせながら、ジョゼはクリスの手に自分の手を重ねた。

ここ暫く入念に復習させられていた淑女教育の成果を存分に発揮して完璧に振る舞わねばならない。何か一つでも隙を見せればきつと一族の石頭たちに屋敷に幽閉されてしまう。

ジョゼは優雅に笑いながら、必死で頭を回転させていた。

「レディ・ジョゼフィーヌ・アナ・マリア・ラ・ブリュイエル様！並びに、ロード・クリステイ・セドリック・セバルカンティ様！」大広間のだ真ん中を突っ切るふかふかの赤い絨緞。その中ほどまで来て長々と自分の名を読み上げられると同時に、ジョゼは自分の膝を折り、王に頭をたれた。

そして、ゆっくり数えること三拍。

取って置き笑顔を作り上げると、できるだけ淑やかに、かつ優雅に面を上げた。

「……ご尊顔を拝する荣誉に与り、恐悦至極にございます」

「噂は聞いておる。国開きの魔道師に匹敵するほどの力を持った才媛がかように可憐な姫であったとはな」

「勿体無いお言葉でございます」

ジヨゼが謙遜してみせると、王は鷹揚に頷いた。

「良い良い。それより、ジヨゼはこのような席は初めてとな？我が娘マルグリッドも夜会は初めてでな、年も近いし、姉として、良き友として仲良くしてやってくれ」

「こちらこそ、よろしくお願いいたします」

ジヨゼは微笑んだ表情を崩すことなく王妃の椅子の一步後ろに控える黒髪の少女に目を向けて会釈した。

王はそれを見届けると、すっと立ち上がった。

「挨拶などの堅苦しい事はここまでだ。皆のもの、存分に楽しむが良い」

ばさつと袖を翻して王が手をあげると、その合図を待っていたかのように軽やかな音楽が流れ始め、王は隣に座していた王妃の手をとると、大広間の真ん中へと降りて音楽にあわせて踊り始め、夜会は完全にくだけた空気にとり包まれた。

「ふう」

「お疲れ様でした、姫。万事つつがなく終わって、良かったですね」

「ホント、もうくたくた」

ジヨゼはちよつと疲れ気味の笑顔を浮かべた。

本当に、ここ数週間、先程のたった数分のためにどれほどの労力を費やしたのか。アラムが馬鹿らしいと言って毛嫌いするのも無理は無い。

と。

「クリス」

凜とした声がジヨゼたちの後ろから呼び止めた。

振り返った先に居たのは、銀髪の少年と、黒髪の少女　この国の王子と王女だった。

それが誰だか判った途端慌ててジヨゼは膝を折って王族に対する礼をとり、クリスもそれに続いて隣で跪いた。

「お久しゅうございます、殿下」

「そんな堅苦しい事はやめてくれないか、さあ、立つて、二人とも」
苦笑したような声に誘われて、二人はゆっくりと立って一礼した。

「ご紹介します、我が一族の長姫、ジョゼフィーヌです」

「初めまして、エルネスト殿下、マルグリット殿下。ジョゼフィーヌと申します」

にっこりよそ行きの笑顔を浮かべたジョゼに王子は嬉しそうに手を差し出した。

「初めまして、ジョゼフィーヌ姫。お噂はかねがね聞いております。魔法学校で雨の研究をなさってらっしゃるとか」

「まだ本格的に始めているわけではありませんが、何らかの実のあるものにできればと思っております」

にこやかに握手を交わした王子の肩越しに、ジョゼをこの場に引っぱり出す原因となった王女がむっとり眉をひそめて俯くのが見えてジョゼは内心首をかしげた。

(どうかされたのかしら？王女ともあるう方があからさまに不機嫌になるだなんて……)

淑女らしくも無い。と胸のうちで疑問に思っているところに、王子は更に声をかけた。

「雨の研究というと、研究対象はこの城になるのでしょうか？折角いらしたので、私が城の中を案内いたしましょうか？」

「え!？」

王子の不意打ちのような突然の提案。それに対してジョゼはぎょっと目を丸くし、王女はさらに眉をひそめた。

いや、ていうか、ありえない。

幾ら相手が王子とはいえ、いや、王子だからこそ、男と二人で人々の目の前から消えるだなんて事は赦されない。そんなことをすればふしだらだのなんだの後ろ指さされまくる。

「勿体無いお言葉、身に余る光栄ではありますが、その……」

「行ってこられてはいかがですか、姫？城を見てまわるだなんて機会は中々ありませんよ。しかも、エルネスト殿下直々のご案内です

し」

真っ青になって慌てて膝を折って頭を下げたジヨゼの隣で、クリスがいつに無くまともな言葉遣いで珍しくもジヨゼの意思とは真逆の方向に口を挟んだ。

「ですが……」

予想外のクリスの横槍にもめげず、ジヨゼは視線で王子とクリスに王女の様子を示唆した。

そんな問題ではないし、ついでに王女の機嫌が最低なのは誰の目にも明白だと言うのに。

ジヨゼの視線の先に気づいた王子は、ああ、と納得した。

「マルグリッドの事はお気になさらず、ジヨゼフィーヌ姫」

「お兄様！」

あっさりと妹を捨てた兄に、王女はぱつと顔を上げて反論した。

「お兄様は今日はマルグリッドの相手をしてくださると……！」

「大丈夫、お前の事はクリスがちゃんとエスコートしてくれるよ。」

僕が彼女を連れて行ったらクリスがあぶれてしまっしね。頼んだよ、クリス」

「畏まりました」

有無を言わさない調子でトントン拍子に段取りが決まり。

会場中の視線を集めていた若い男女が当初予定されていた組み合わせとは異なるペアで別れた時、密やかな動揺が大広間を駆け巡ったことを、ジヨゼはまだ知らずにいた。

大広間からベランダへ一歩外に出ると、手の届きそうなほど近い夜空は瞬く星々で埋め尽くされていた。

ただそれだけで、今居るこの城が重力の枷を外れて空に浮いている事を如実に実感する。

大昔のご先祖様の残した巨大な魔法機構の塊を動かすその構成を想像すると、気が遠くなりそうで。

ジヨゼは恭しげに差し出された王子の手に己の手を重ねて、夜の庭へと一歩を踏み出した。

魔法の明かりで照らし出された花畑を抜け、月の光の零れ落ちる森を通り、王子は手を引いたまま城の奥へと進んで行く。

その間、供される話題も、王子の手のぬくもりも、欠片一つも不満がありえるはずが無いのに、ジヨゼの胸の奥に何か落ちつかないものが溜まっていく。

「あの、王子、一体何処へ……？」

「もう少し先ですよ」

ジヨゼが会話の腰を折って疑問を差し挟んだことを気にする風も無くにつこり笑って王子はまた一つ城の門をくぐる。

と、突然目の前が開けた。

黒々と凧いだ表面。月を映した鏡にそよ風が小さく波立たせる。

「……これ……全部、水……？」

対岸が見えないほどの大きさの湖が目の前に広がる。今までのジヨゼの常識的感覚を全て否定するような光景を前にジヨゼは呆然と呟いた。その彼女の手を放すと、王子は一歩前に進み出て左手の甲を虚空に翳し、魔法を発動させた。

「道よ！」

王子の声と共に、ジヨゼの周囲の空気がヴン、と歪んだ。否、空間全体に隠されていた構成が、王子の声に反応して発動した。

一瞬のうちに虚空に浮かび上がった魔法陣は、ジヨゼが今まで見たことも無いような構図を描きながら湖の水面に到達し。

次の瞬間、目の前の水面が光を放ったかと思うと、水中から円形の飾り床が出現した。

「さあ、姫、こちらへ」

王子に手を引かれるがまま湖に近寄りかけて、ジヨゼはその場で立ち竦んだ。

「こ、これに乗るんですか？これ、船か何かですか？」

「まあ、人を運ぶという点では船も同じですが、これは船では行けないところへ連れて行ってくれるんですよ」

さあどうぞ、と王子ににつきり促されるままジヨゼはドレスの裾を摘み、躊躇いがちに丸い床の上に移った。

王子も一緒に乗り込むと、ジヨゼの腰に手を回してジヨゼの身体を引き寄せた。

一段と二人の間が近づき、触れた箇所から薄いドレス越しに互いの熱が伝わり溶け合う。

流石に恥ずかしくて一歩退こうとしたのに、王子は腕に力を込めてその動きを牽制した。

「動きますから、危ないですよ」

ジヨゼの耳元で王子の甘い声がすると同時に、二人の乗った床が音もなく滑るように動き出した。いや、むしろ二人を乗せた床は静かに湖中へ沈み始めた。

げ！と空気を超圧縮したかのような声がジヨゼのどから漏れる。

「エ、エエエルネスト殿下！」

「大丈夫です」

思わず恥じらいも何もかも捨てて王子にひしつとしがみついたジヨゼの肩を抱きながら、王子は彼女の耳元でそつと囁いた。

「水は入ってきません。落ち着いて見れば判ります」

「は、入ってこない？」

不安に瞳を揺らせるジヨゼの隣で、王子は鷹揚に頷いて視線を下に

下ろした。

水面は床面よりも拳一つ分高くなるほどに二人を乗せた床は沈み込んでいたのに、確かに決壊することなく水と空気が分離した状態が保たれていた。

「……こ、これは……」

「魔法ですよ。床に空気空間を固定化させる、と説明すれば、聡明なジヨゼフィーヌ姫にはお解りいただけることでしょう」

「空気空間を、固定!?!」

ジヨゼはあつげにとられて周囲を見回した。

彼女やその他魔道師の間の常識では、それはまだ出来ないはずの技術だった。

物質の固定ならば簡単に行える。全てを動けないように感じながらめに縛ってしまえば良いのだから。

だが、今ジヨゼの周囲で起こっている事は全く違う。ジヨゼの周囲の空気は動く事が可能で呼吸できるのに、水と空気の存在する空間の境界は崩れない。

そつと、ジヨゼは手を伸ばしてみた。

細い指先が水の壁に触れると、すうっと何の抵抗もなく指は水の中へと吸い込まれていく。

そのまま手をひっこめると指についていた水滴は波紋を残して壁へと飲まれていった。

「完全なる空間固定……まさか、まだ理論も構築されてない筈なのに……」

「国開きの魔道師、あなたの祖先の残した偉大なる遺産のほんの一部にすぎません」

現代の魔道技術をもってしても、国開きの魔道師には遠く及ばない。改めてかの人との力の差の程を実感させられて、ジヨゼは寒気すら覚えながら自分の頭上にまで迫った水の壁と、その向こうの景色を見渡した。

初めて見る、水の中の世界。

空に燦然と輝く月の光が、水の中にまるで織物のように陰影を作り出し、見たことも無い不可思議な形状の植物たちが流れに身を任せ、揺らめいていた。

「姫、あちらを」

王子がそう言って指し示した方向には、銀色の小さなきらめきがいくつも集まってまるで一個の生命体のように動いていた。

星の煌きのよう、と数瞬見惚れた後、俄然興味がわいてきて声を逸らせながらジヨゼは王子を振り返った。

「あれは何ですか？」

「魚ですよ。あれは魚が群れを成して泳いでいるんです」

「魚！？」

ジヨゼは目を見開いて魚群を見つめた。

水中に生息する動物、魚類。

その存在は地上ではもはや夢幻の如く書物で語られるだけになっていたのに、それをこの目で見られるだなんて！

密かに感動に打ち震えるジヨゼの隣で、王子は楽しげな声で説明を加えた。

「食べると結構美味しいですよ」

「！食べるのですか！？あんな貴重なものを！！」

「ええ。宮廷料理人は魚を料理する事が出来て一人前だと言っていましたよ。姫が今度晩餐会にいらっしやる折には是非メインを魚にすることにしましょう」

につこり非の打ち所の無い完璧な微笑を浮かべる王子を、ジヨゼはあっけにとられて見ていることしかできなかつた。

レイ、クリス、アラム。お城って凄いところだね。

ジヨゼと王子の二人を乗せた床はどんどんと深く潜り込み、それにつれて徐々に月の光が届かなくなってあたりは暗闇が支配するようになって来た。

それこそ、すぐ傍の王子の顔すら、朧げなほどで。

確かなものは、腰に回された王子の手のぬくもりと、耳元で囁かれ続ける王子の声だけ。

「もうすぐ着きますから、気をつけて」

王子の囁きと同時に床が停止して、ジヨゼは周りが全く見えない状況のまま、エスコートどおりに恐る恐る床から降り立った。

途端、ジヨゼたちが降り立った部屋がぼうつと薄暗い光を発し、広大な空間の存在を明らかにした。

見渡す限り、何の飾りも無い、真っ黒な壁に覆われた半球状の部屋。唯一するのは、部屋の丁度中心に申し訳なさ程度に据えられた円形の台座のみ。

この部屋の目的が全く読めず、ジヨゼは隣に居る王子の顔を不安げに見た。

「あの、一体この部屋はなんなのですか？」

「この部屋の名称は玄室。この国の全ての始まりにして、国開きの魔道師がこの城を作り上げる魔法を振るった台座の間と言われています」

「ここが……！？」

何千年も昔の魔法を振るった場所。

まさかそんなものがこんな風にはほぼ完璧な状態で遺されているとは思ってもしなかった。

過去に使われた魔法を解析するには、魔法を振るわれた状況を解析するのが最も手っ取り早い手段といわれている。ここは、ジヨゼにとつて、そして城について研究するあらゆる魔道師にとつて第一級の資料だった。

まるで心を奪われたかのようにふらふらと台座に近づいていくジヨゼの後姿にほくそえみながら、王子はまた手をかざした。

「光あれ！」

王子の声が広い空間に響き渡ると、うつすらと虚空が輝きだした。浮かび上がったのは幾何学模様。おそらく、普通の人間には唯の飾りにしか見えないような軌跡でも、ジヨゼをはじめとする魔道師た

ちにはもつと意味のあるものとなる。

「魔術構成!？」

「そう、国開きの魔道師が構築した、全ての基盤となった城の魔法の完璧なるオリジナルです」

「素晴らしいわ!何千年もの前のものなのに、風化した気配すらないなんて……こうやって外気に晒されずに保管されていたからこそね」

目を輝かせながら台座の横で暗闇に描かれた緻密な設計図を見続けるジヨゼに、王子は手を差し伸べた。

「台座へどうぞ、ジヨゼフィーヌ姫」

優しい、しかし拒否を許さない雰囲気そのまま押し流されて、ジヨゼは促されるままに台座に片足をかけた。

「君は、耐えられるかな？」

え?と台座の上に立ったジヨゼが王子を振り向いた瞬間。

部屋一杯に広がっていた光跡が一齐にジヨゼに向かって収束してきた。

「な、きゃあああああああああ!」

幾何学模様はジヨゼの身体に触れて溶けるようにそのまま消えてゆく。

否、ジヨゼの体内に溶け込んでゆくのだ。自分の体の中で、何か判らないものが蠢いている感覚を、ジヨゼは確かに感じていた。

「いや、やめて!やだ!いや、な、にい、や、や、あ、ああ、ああ!」

何かが、ジヨゼの意識に反して身体を動かしてゆく。

腕が、指が、足が、腹が、背が。体のありとあらゆるところがジヨゼの自由ではなくなっていく。

「か、えし、て!わた、し、を!」

膝が伸びる。かと思えば肘が伸びる。指が伸びて、胸が反って。

ジヨゼの知らない何者かが、ジヨゼの体の中に満ちて膨らんで増えていく。

その感覚が頭のでつぺんにまでやってきたそのとき、ふ、とジヨゼは今までの凄まじい圧力から開放された。

恐る恐る目を開くと、一転、そこには真っ白な、染み一つ存在しない空間があった。

壁も、床も、天井も無い。上も下も右も左も判らない、何もかもがホワイトアウトした視界。

「……………ここ、は？」

『貴方は、誰？』

不意にジヨゼの背後から、少女のような声がした。

驚いて振り返ってみると、そこには。

「わ、私……………？」

白の絹地に銀の月の紋章の刺繍。ふんわりと広がったスカートは前が膝上丈なのに後ろは引きずるほどに長い。ブリュイエール家の伝統の礼服のデザイン。

腰まで伸びた金の巻き毛も、空の青さを映した瞳も、肌の色も顔立ちも、何もかもがジヨゼと瓜二つなのに、唯一つだけ、異なるものがあった。

髪飾り。

ジヨゼのような銀細工ではなく、甘い香りを放つ月下美人　ブリュイエールの当主の象徴とされるその花が、彼女の髪に挿さっていた。

ふつと、彼女の輪郭が虚ろになった気がした。

『貴方の望みは、何？』

「私の、望み……………？」

ジヨゼは鸚鵡返しのように呟いた。

自分の望み？

皆に自分を認めてもらいたい。だから、強い力を持ちたい。その指標としてご先祖様に挑む。降雨システムの解析とその改変に成功すれば自分のご先祖様以上の魔道師と認められ、水が足りないと困ってるスラムの人たちも……………

ジヨゼの胸のうちを、言葉にならない思いが浮かび上がった瞬間。虚ろな少女の目がかっと見開かれた。

『私の国を滅ぼす悪魔め！』

少女の姿は一瞬にして無数の剣に形を変えて、ジヨゼに向かってきた。

「いや、やめてー!!」

ジヨゼは咄嗟に防護魔法を自分の周囲に張り巡らせて剣を防いだ……はずなのに。

剣はやすやすとジヨゼの防御壁をすり抜けて、ぶすり、ぶすり腕に、足に、胴体に、何本も何本も突き刺さっていく。

そのたびに苦痛に絶叫を上げながらも、ジヨゼは目を閉じられなかった。

剣が肉を突き破り、骨を砕き、その度に血飛沫が花火のように上げられ、自分の目の前で、自分の体が原形をとどめぬほどに細切れにされていく。

その激痛たるや、正気を失いそうなほどなのに、狂うことすら許されずに、目の前の光景がずっとジヨゼの脳内に入り込んでくる。

はっとしてジヨゼが視線を上げると、目の前に剣先が迫っていた。

「いやあああああああああ!!」

ジヨゼは目を瞑って衝撃に備えるほかは無かった。

「……姫！ジヨゼファイー又姫!!」

はっと目を開けると、眼前に心配そうな王子の顔が迫っていた。

「……エル、ネスト……殿下……?」

「ああ、良かった、気がついたのですね?」

王子は腕に力を込めてジヨゼを抱きしめた。

ジヨゼはその肩越しに、無数の剣で粉碎された筈の自分の手足を見た。

何処にも、傷一つ残っていないかった。

(私、幻覚を……?)

とすると、あの少女も幻覚ということになる。

魔法に残存する幻覚。話には聞いた事がある。尋常ならざる思い入れ、意志の強さをもって魔法を揮った場合、術者本人の姿が極稀に見える、と。

つまりあの少女は、

「……国開きの、魔道師……?」

「『彼女』に、会ったのですね?」

王子はそつと腕を緩めて、正面からジヨゼの顔を見つめた。

「ジヨゼフィーヌ、やはり君は僕がずっと待ち望んだ人だった」

静かな狂喜、と呼ぶに相応しい笑顔が、王子の顔に浮かんでいた。

その表情に心底恐怖を感じた。魂の奥が震える心地がして。だ

が圧倒的なまでの疲労感がジヨゼの全身を苛み、ジヨゼは何一つ抵抗らしい抵抗も出来なかった。

「僕と、結婚してください」

王子が何を言ったかを理解する暇も無く、ジヨゼの意識は混沌への重力に負け暗闇に没する。

……完全に失神したジヨゼの唇に、軽くキスを一つ落として、王子はジヨゼを床に寝かせた。

懐から短剣を取り出すと、自分の指先に軽く当てるとぷつと音がして血が皮膚の上に溜まる。

それに唇を寄せて王子が何事か呟くと、血は蠢きながら宙に浮きどんどん透明になってゆく。

そうして出来たルビーとも見まごうような深紅の宝玉を、王子は懐から取り出した白銀の指輪の台座にはめ込んで、力なく横たわったジヨゼの指に通した。

その手を引き寄せて、王子はまた一つ指輪にはめ込まれた石に口づけを送ると、今迄とはまったく違う、凍てつくような声色で呟いた。

「十六年、君を待った。僕はもう待たない。君は、絶対に僕が手に入れる」

絶対零度の冷たい瞳で、王子はジョゼを見つめていた。

幕間

暗闇の中で、遠くから人々の叫び声が聞こえる。

「魔女を殺せ！」

「滅びの魔女を殺さねば我らに未来はない！」

「あれが居るから魔王は一族を滅ぼそうとするのだ！」

「生きながらに腐りゆくこの世の地獄に生きるため神は我々を生み出したとでも言うのか！」

狂気に昂る民衆を、ひときわ大きな声が制する。

「馬鹿なことを言うな！あの子を欠けば王は、我ら悲願の霸王は生まれない！」

「我らは永劫にこの緑の監獄から抜け出すことが叶わなくなるのだぞ！」

男の威圧に押されて一瞬の静けさが戻り、……しかし。

「だ、だが、飢えに疫病、苦役に略奪、一族はもはや半分が失われたのだぞ！」

「そうだ！我等はいつまでこうやってこの生き地獄を味わねばならないのか！」

「本当に予言はなるのか！？」

「やめろ！！！」

ばん！と扉が開かれて、暗闇に光がさし込んだ。

光に相對する少年。その金の髪を、太陽がまぶしく輝かせる。

小さな体にそれと判るほど怒気を孕み、外にいる人間に怒鳴る声が聞こえた。

「彼女が一体何をした！？ただ強い力を持っているだけで、無能な魔王お抱えの占い師が好き勝手に破滅の魔女などとあたりもしない予言をしただけだ！恨むべきは僕らをここに送り込んだ魔王だ！それを間違える者は皆一族の滅びを望む帝国臣民と同類だ！」

逆光に浮かび上がる華奢なシルエツト。その向こうに広がるむせ返

るほどの緑の輝き。

あんな植物の密集地帯、
うちの近所にあつたかしら？とジヨゼ
は疑問を持った。

目が覚めて、一番最初にジヨゼの目に飛び込んできたのは淡い色彩で描かれた小鳥の天井画。

「どこよ、ココ？」

明らかに自分の部屋ではない。というか、よく考えたらどうして今ココに自分が居るのかよくわからない。

一瞬前まで見ていた夢が色鮮やかな原色極彩色だったために白と水色が大半を占める光に満ちた空間に適應するのに時間がかかる。その隙に。

「お目覚めでございますか、ジヨゼフィー又様？」

しつとりと落ち着いた声がして、黒を基調としたお仕着せを着た女性がジヨゼの居るベッドのそばにたたずんでいるのにようやく気付いた。

やっぱり、自分の家ではない。

ジヨゼの家ではジヨゼのことをお嬢様と呼ぶし、メイドの服の形も違う。

そもそも、そういえば昨日は城でパーティーに参加していたはずなのに、いつの間にか記憶がぶつとりと途絶えている。

私、昨日どうしたのかしら、と思いかけたその瞬間。

ジヨゼの居る部屋の扉が急に開いて、雪崩のようにメイドたちが入ってきた。

「おはようございます、ジヨゼフィー又様」

「お着替えお持ちいたしました」

「ジヨゼフィー又様は何色がお好みですか？ああ、御髪も梳かさねばなりませんわね」

「それに化粧も。お可愛いジヨゼフィー又様ですが、更に愛らしくして差し上げなければ」

あれよあれよという間にベッドから連れ出され、寝巻きの上から何

着も何着もドレスをあてがわれてこれも違うあれも違うとまるで人形遊びのように侍女たちにいいようにされていく。

生まれてこの方十六年、男に取り囲まれることには慣れていても女に取り囲まれて身動き取れなくなるのは物心ついて以来初めてのことであった。

かと言って、いつも男たちに行っているように怒鳴りつけたりして構わないものか、というより、ココ本当にドコ？と躊躇している間に彼女たちの並々ならぬ熱意に飲み込まれてしまって。

小一時間後。

「これで準備万端、ですわね皆様方？」

「まさしく、完璧なるお姿」

「これである方のお心もばっちりですわ！」

へるへるになつて反論する気力もうせたジョゼを前に、メイドたちは満足げに頷いて礼をして下がっていった。

後に残ったのは目を覚ました時に一番最初に挨拶をしてくれた侍女。「では、ジョゼフィー又様、朝食のご用意ができましたのでご案内させていただきます」

……もうどうにでもして、とジョゼは言われるままにメイドの後ろをついていった。

建物を一歩出ると、澄み切ったさわやかな風がジョゼの頬を撫で、ドレスの装飾につけられたレースを優しく揺らしていった。

白一色のドレスに、これでもかと言うほどふんだんに使われたレース。要所所所にあしらわれた淡いピンク色のリボン。美しい曲線を描くように膨らんだスカート裾がふわりとたなびけば、騎士に永遠の愛と忠誠を誓われる物語の姫にでもなった感じがする。

ここ数年、魔法学校の制服である黒一色のシンプルなローブをいつも羽織っていたために、ココまで乙女趣味に走られた服を着ると頭に花が咲いたような気がして、ずきずき痛みを訴える頭を抱えてジョゼフィー又は侍女に悟られぬように溜息をついた。

そこらじゅうに花が咲き乱れ、水路や灌木や彫像が効果を計算されつくした配置についている庭園を侍女に連れられて通り過ぎる。

なまじ水の貴重なこの国で、園丁のプライドと神経質さがこれでもかと窺えるほど手を入られた庭はジヨゼの家のも同じだったが、何か決定的に違うものがある、とジヨゼの感覚は違和感を感じ取っていた。

なんだか空気が違う。そこら中に何かが潜み、蠢き、窺っている、例えるなら肉食獣に睨まれた草食動物が感じるような恐怖、そんな違和感。

水路に沿って天使像を回り込んだジヨゼは目を疑った。

「……はい？」

視界に飛び込んできた庭の端。その先に見えるのはお隣の敷地ではなく、虚空。そして眼下には霞んで見える地平線。彼方まで続く砂の海と、手前に広がるオリブの林。

状況を理解して危うく叫びかけたその声を、ジヨゼは何とか飲み込んだ。

（ココ、お城！？私お城に泊まったの！？）

ジヨゼは先ほどメイドたちに怒鳴りつけなかった自分の自制心を心底褒めてあげたかった。

もしそんなことをしていざこざを起こせば下手すると王家と事を構える羽目になる。

その前に『躰がなつてない。行儀見習いやり直し！』と一族の長老方に屋敷の奥深くに閉じ込められる羽目になっていただろう。

よくやった、頑張ったわね、私。とジヨゼが内心本気で滂沱の涙を流し続ける中、侍女は城の周りを取り囲むように浮いている浮島のひとつにジヨゼを案内した。

文字通り空中庭園の一角、彼方まで一気に一望できるその光景を楽しむため、浮島にはパーゴラが設けられ、網棚に絡まるようにして生い茂った蔦がまだらな蔭を提供していた。

その下、心地よい風が吹き抜ける場所に銀色の髪の少年が一人佇んでいた。

「……お、おはようございます、皇太子殿下」

ジヨゼは緊張気味に王子に声をかけた。

だって昨日、王子と一緒にいたことまでは何とか覚えているがその後の記憶が途切れている。自分が何かしでかしてしまったとしても判らない。ていうか、なんで昨日の記憶が途中で途切れてしまっているのだろうか？どうしよう、小父様方への愚痴とか恨みとか管巻いてたりとかしたら！それより、何か失礼なコトしなかつたかしら！？

頭の中がぐるぐる担ってパニックに陥っているジヨゼに微笑みかけると、王子は視線を手元に落とした。

手にしていたのは、繊細な銀彫刻。よくある、ありふれた魔法仕掛けの子供のおもちや。

王子が水色に輝く宝玉を押すと、小さな穴から銀色の霞みが広がって。

『見よ！全てを滅ぼす魔女が全てを統べる王の手を取って舞い降りる！富める一族は絶望の日が来ることに慄き怯え、災禍の一族はあらゆる幸福が齎されることを約束されり！！』

……朝の爽やかな時間に流れるにはそぐわなさすぎる殺伐とした内容の唄を詩人が吟じる虚像が、立ち上る霞みの上に浮かび上がる。その姿が目に入った いや、その声が耳に届いた瞬間、ジヨゼは巨大な引力によって意識が暗闇にぐいつと引きずり込まれるような感じがした。

「っ？」

無重力の気持ち悪さ、眩暈にも似た感覚。視界が白濁しかけてジヨゼは思わずテーブルに寄りかかった。

「大丈夫ですか？まだ昨日の疲れが残っているのでしょうか、どうぞこちらへ」

「あ、ありがとうございます、皇太子殿下」

差し出された手に導かれるまま腰を落ちつけると、心配そうな声がすぐ近くで囁かれた。

「お顔の色が大分悪い。誰か呼びましようか？」

「いえ、どうぞお構いなく！大丈夫ですから！」

ジヨゼは慌てて引きとめた。そんなことよりも先に、絶対にやらなきゃならないことがある。

「それよりも殿下、昨日は私、あの、……何か失礼をいたしましたませんでしたか？なんだか途中から記憶がなくて……気がついたら朝になっってしまったって……」

ジヨゼが恐る恐る尋ねると、王子は数瞬視線を虚空に漂わせた後、おもむろに煌びやかな笑顔を取り繕って言いきった。

「何事もありますませんでしたよ。社交界にデビューすると言うことでさぞかし準備が大変だったでしょう。恐らく一段落した事で疲れが一気に出て倒れてしまったんですね」

王子のその妙な間がいかにも気遣いましたと言う感じがして、ジヨゼの背中に戦慄が走る。

一体自分は何をしたのか。いや、たとえ酒とかかっくらって理性を無くしたとしても自分はそんな品格の無いことなどしないと信じているが、ていうか、昨日はお酒どころかチーズの一切れだって口にする前に大広間を辞去したのでそんな筈は無いし……。

あーだのうーだのはつきりと判別つかない音を発しながらぐるぐる悩んでいるジヨゼを気遣って、王子はそっとジヨゼの前髪をかきあげて。

「んー、熱は無いようですね」

「いや、そ、な、あああああああの、殿下!？」

突然視界を王子の顔が占める。目の前の薄紫色の瞳の中に赤面して慌てふためく自分の哀れな姿が見える程イキナリ近づいた二人の距離。それに驚いてジヨゼの声が思いつきり上擦った。

王子が熱を測ってくださっていたのだと気づいたのは、素っ頓狂な声を出した後のことで。

良く考えれば生まれてこの方、ちやほやされることは多々あってもこんな風に接触されることには不慣れだ。

もしかしたら王子は、ジヨゼにとって生まれて初めての苦手な存在なのではないか。

そもそも、ジヨゼが失礼の無いようにと気を使わねばならない存在自体が初めてだ。

「あれ、熱が上がってきたような……」

「あああの、おお、おおお戯れはお止め下さい！」

ジヨゼが慌てて肩を押し返すと、王子はにっこりと人のよさそうな笑顔を浮かべた。

「良かった、お元気そうですね」

「はははははい、おか、げさまで」

ぷしゅー、と今にも音を立てて湯気を出しそうなジヨゼの様子に気付かない振りをしてジヨゼから離れると、王子はポットに準備万端整っていた紅茶をカップに注いだ。

「どうぞ。昨日、姫の具合に気付かず城中引きまわしたお詫びです。宜しければこちらも」

研究の役に立つと思いますよ、と付け加えて王子は先ほどまで見ていた幻影器をジヨゼのカップの隣に置いた。

正直、詩がおどろおどろしい内容で女性への贈り物にするにはそぐわないような気もするが、せっかくの王子の計らい、とジヨゼは笑顔でそれを受け取った。

「ありがとうございます。初めて聞く歌でしたけれど、これは……？」

「下界ではもう廃れてしまったのですか？僕は国開きの魔術師にゆかりの物と聞いていますが」

国開きの魔術師にゆかりの詩？

貰って困る物でもないし、貰って差し障りがあるほど高価な物というわけでもなさそうだし、と穏便に受け取る方向で方針を固めた。

「貴重な物をありがとうございます。殿下。きっと研究に役立って

みせます」

ジヨゼは謹んでその銀細工を受け取った。ぱつと聞いた感じでは、研究に直接関係しそうな気がしなかったが、城の魔法の文化的側面からの訴求に役立つ……かもしれない。

おとなしくおもちゃを受け取ったジヨゼが笑顔になったのを見て、王子もつられて微笑んだ。

「僕にできることは城を案内したり指輪やこれをさしあげるぐらいですから」

「……指輪？」

は？指輪ってなんの事？と一杯疑問符を周り一杯に浮かべたジヨゼの視線を受けて、王子は困ったような笑みを浮かべてジヨゼの手元に視線を落とした。

それに倣い、ぎぎぎぎ、と音をたてそうな程ぎこちない動作でジヨゼは自分の手に目をやる。

そこには、今まで気づかなかった、赤い石。

……しかも、薬指。

……冗談！意味深にも程がある！！

「で、ででででで殿下！あの、ここ、こ、これは！？」

泡くつて舌をかみまくりのジヨゼに、王子は無邪気につこりと微笑みかけた。

「それがあるところの城ではとても便利ですよ。色んなところに行き放題ですから」

この城、いたるところに魔法が張り巡らされてますからね、と言われて、もう一度よく指輪を見てみると、確かに赤い石から微かに魔法の気配がした。

魔法認証？

さすがは空の城、魔法仕掛けの魔法の塊。王を守るセキュリティもバッチリらしい。

研究者として、ジヨゼは暫しその石にかけられた魔法に目が奪われる。

「……良かった、気に入っていただけただけですよですね」

ほ、とどこか安心したように吐息をつく、王子は立ち上がってジョゼの手をとって接吻を落とした。

「申し訳ありませんが、僕もう行かなければ……。ですがどうぞこゆっくりなさってください」

アラムにはない優雅さとクリスにはない誠実さを含んだ丁寧な態度で王子が辞去の礼を取ると、ジョゼも慌てて立ち上がって礼をした。「いえ、こちらこそ、本当にご迷惑を……」

申し訳なさでいっぱいはいっぱいのジョゼに爽やかな微笑だけを残し王子は浮島を降りていく。

その後姿を見送ると、一気にジョゼの肩から力が抜け落ちた。

「……人に気を使うのがこんなに疲れることだなんて、初めて知ったわ」

何かと地味に人生初体験が盛り沢山な王宮滞在。ふう、と一際大きいため息をついて、ジョゼはテーブルの上に並べられた朝食の観察を始めた。

一人分にしてはずいぶん多い、しかし、ナイフやフォークなどは一組しかないのやっぱり一人分なのだろう、丁寧に扱おうとしているのがよく判る料理が並んでいた。

みずみずしい野菜のサラダに、香ばしい匂いがする焼きたてのパン。きつとカラフェに入れてあるオレンジジュースは今朝採って絞ったばかりだろうし、未だにホカホカ湯気がたってる紅茶は先ほど王子が手ずから淹れてくれた逸品だ。

そうやって一品一品眺めていたジョゼはふと、卵やらマッシュポテトやらが乗っている皿に、見たことの無い物体が添えられているのに気がついた。

「？」

見たことのない半透明の白いモノ。ぶにぶに、としているその佇まいはどうみても植物ではないけれども、寒天でもなければゼリーでもない。

妙につややかに輝いているのはオリーブオイルで和えられているからだろう。

ジヨゼはフォークを手に取りおそるおそる突っついてみた。くしゃ、つという、感触。だけどちよつとやそつと強く押したところで突き抜けそうにないほど弾力に富んでいる。

まるで生の肉みたい。でも色が全然違う。　　そこまで観察して、ジヨゼはふと気がついた。

植物ではないもの。獣肉に良く似た、鳥でも豚でも牛でも羊でもないもの。

「……………まさか、お、お、お、お魚!？」

未知の可能性に気づいて、ジヨゼの胸がこらえきれぬ期待で高鳴る。すっごーい、きゃー、本当にホンモノ!？ふおおおおお!などなど小声で呟きながらフォークでぺらりと切り身をめくってみたり、光にすかしてみたり、つつきまわしたりして己の欲望のまま好奇心を満たしている姿はあまり褒められたものではない気もしたが、そんなことよりも目の前の不思議物体のほうに気になって気になって己が探求心の赴くままにそれを弄くり倒していた。

「なんてはしたない。ブリュイエールの長姫と言えども底が知れるというものね」

不意打ちの如く突然後ろから声がして、ジヨゼは驚いて振り返った。漆黒の髪が風にそよぎ、薄紫色のスカートがふわりと揺らぐ。

真っ白なパラソルが作る淡い影の下で、きついまなざしがジヨゼを射抜くように注がれる。

「マルグリッド殿下……………」

げ、まずいところを見られた、と背中に冷や汗が伝い落ちる。

「おはようございます、王女殿下。昨晚はゆっくりとご挨拶も出来ず大変失礼いたしました」

「まったくだわ、王女である私へのあの態度!ブリュイエール家の忠誠心を疑わざるを……………」

滔々と高説をたれようとした王女の視線がジョゼフィーヌの手に留まり、王女は大きな目を更に丸くして、凝々とそれに視線が釘付けられる。その視線に気がついてジョゼが答えた。

「……ああ、この指輪ですか？これは、エルネスト殿下が私に便宜を図ってくださって……」

「お兄様が！？」

ジョゼの言葉を聞いた途端、王女の秀麗な顔が般若へと激変した。次の瞬間。

「げっ！！」

山盛りのサラダが乗った白い皿が飛んできて、ジョゼは咄嗟に横へと避けた。

「ちっ！避けるんじゃないわよ、不忠者！」

「勘弁！！なんでサラダ投げつけられてほいほいぶつかってなきやなんないのよ！」

王女の悪態につられるようにしてジョゼも思わず怒鳴り返した。

「煩い！お黙り！！」

それがさらに王女の怒りに火をつけたのか、王女は手当たり次第に投げ出した。

宙を舞うナイフやフォークの銀食器、テーブルに綺麗に生けられていた花、細かな飾り切りをされた果物に香ばしいパン。朝ごはんの波状攻撃をことごとく避けながら、ジョゼは必死にもうひとつ考え事をしていた。

王女を制するのはたやすい。魔法を使ってしまうばいいのだから。

だが、その後で厄介な問題に発展しないはずがない。

それに、王女がいったい何に怒っているかも判らない。判らなければ、宥めることもいさめることも出来やしない。制することなど不可能だ。

王女の手がオレンジジュースでいっぱいのパitchャーを手に取るのを見て、あれは軽く避ける程度じゃジュースがかかって服がしみになっちゃうわ、とどこか冷静に観察していると、一瞬、王女の動き

が鈍った。

「な、なんであれがこんなところに……」
「！」

おどろおどろしい詩を唄うおもちゃに視線が釘付けになり、声に驚きとおびえが混じり、王女の体が小刻みに震える。

ジヨゼは一瞬の間を見逃さず素早くピツチャーを取り上げてそのままテーブルに固着する魔法を発動させた。

これで王女の力ぐらいではピツチャーを取り上げることすら出来なくなつた。

ふう、やれやれ、と一息つきかけたジヨゼを後ろから激しい衝撃が襲う。

は？と思う心の準備も受身の態勢もとる暇なく、盛大に頭から地面に突っ込んだ。

その上に馬乗りになつて王女はジヨゼの手をきつちり逆に固めて猛然と指輪に手をかけた。

「ちよ、イタ、痛い、痛いってば！何するの、やめなさいよ……」腕をありえない方向に引つ張り上げられて思わず悲鳴を上げたジヨ

ゼに構うことなく、王女はジヨゼの指から指輪を奪おうとぐりぐりと指輪を力任せに引つ張つた。

「キツ！貴方指太くてよ！？醜いデブにこの指輪を嵌める資格は無いわ！私に献上なさい……」

「いや、そこまで私太つてないし！？ていうか、それより訳わかんない！」

「この指輪に相応しいのは私よ！私が一番この指輪を欲しがってるんだもの！私の物よ……」

「意味不明！」

この上なく破綻した論理を押しつけてくる王女の暴挙に耐えかねて、ジヨゼは思いつきり腕を振り払つた。が、そのとき運悪く王女の襟周りを飾っていた繊細なレース飾りに爪が引っかかつて、その勢いに引きずられるままレースはか細い悲鳴を上げてちぎれ飛んだ。

露わになる、王女の雪のように白い胸元。そこに揺れる銀の華奢な鎖のトップには、ジョゼの指輪と同じ赤い宝玉が頼りなげに輝いていた。

「あれ……?」

なんだ、同じ物持つてるじゃない……とジョゼが口の端にすると、王女はずざつと後退ってジョゼから離れた。

「……見たわね?」

「み、見てません!」

「嘘おっしやい!!」

王女は胸元をかばいながらすすくと立ち上がると、ジョゼの鼻先に人差し指を突きつけた。

「ジョゼフィーヌ・アナ・マリア・ラ・ブリユイエル!覚えてらっしゃい、この借り、いつか必ず返して見せるわ!!」

三流悪役のような捨て台詞を吐くと王女は来たとき同様旋風のごとく浮島を立ち去った。

兄王子と同じく、その後姿を見送る事しか出来ないまま、ジョゼはがっくり頂垂れた。

「やっぱ、女の子の胸肌蹴たのはまずかったよね……」

鎖骨までぐらいいしか見えなかったけど、相手が王女である時点で大問題だ。

あー、やっちゃった。王女はきつと御付きの侍女たちに盛大に不満をぶちまけるだろう。そしてそれはきつとブリユイエールの小父様たちの耳に届くに違いない。なんとなれば、城で侍女がすつ転んだことすら聞きつけたら狂喜乱舞してジョゼの躰のやり直しと称して魔法学校の退学を迫ってくるだろう。

まったく、踏んだり蹴ったりだ。せつかくの社交界デビュー、期待していたわけじゃないけど呪われているのかと思うほど何一つうまく行かなくて、悲しくなっておなかまですいてきた。

せめて王女の暴挙に巻き込まれずに無事だったものをいただこう、

と辺りを見回して。

「ああ！！私のお魚さんが！！」

哀れ、白身魚のマリネの乗った皿は無残にも地面にぶちまけられていた。

ジヨゼがお魚を食べると言う千載一隅の機会を逃したそのころ、地上ではアラムが相変わらず不機嫌絶頂だった。

昨日の夜の出来事が引き金となつて魔法学校の内部に、いや、世間に、もとい、アラム曰く『お貴族様』のサロンなどに吹き荒れた嵐は、まだ始まつたばかり。

アラムは卒業研究の指導教官から一週間で読破しろと渡された分厚い資料をめくりながら廊下を歩いていった。

いくつもいくつも研究室が並ぶ研究棟を一巡すると、研究の合間に世間話に花を咲かせる学生の声が好きでも耳に入ってくる。

「ブリュイエールの長姫が王太子妃になるらしい」

「まさか。魔道師協会がそんな事を許すものか。かの姫を退学させるのと同義語だぞ」

「魔と王が交われれば魔王が生まれる。王宮魔導師は魔王を生み出さぬために王家との縁組は禁止されている。子の学校を卒業すれば自動的に王宮魔導師となるというのに」

「開闢以来の不世出の天賦の才を、王宮の奥に閉じ込めてしまつたぞ、宝の持ち腐れどころの話では無い！」

「とはいえ、貴族筆頭のブリュイエル家本家長姫、王子との年の差は一つ、家柄も年回りも文句のつけようが、どこるかこれ以上の良縁など有り得る筈も無い」

「加えて、マルグリッド殿下を放り出してジヨゼフィーヌ姫の相手をするほどの殿下の御執心」

「王家の意向を妨げうるものなど……」

「ところで、マルグリッド殿下の降嫁先だが……」

「噂は本当か？セバルカンティ伯爵家、ブリュイエール一族とは言え名ばかりの末席の成金が」

「だがジヨゼフィーヌ姫とも親しく、王子にも覚えめでたく……」
「変わり者との噂が……」

「そこはほら、腐つてもブリュイエルということだ。所詮、ブリュイエルと他の貴族とでは、格が違うというもの」

「ま、詳しい話は金魚の糞のアラム・ベリエルが知っているだろうさ」

くすくすと嘲るような笑い声が耳に届き、アラムはわざと大きな音を立てて歩き出した。

途端、途切れる内緒話の声。

聞かれて困る話なら誰が居るのか判らないような場所で話すな！と心底怒りを覚えながら、アラムは落ち着かない研究棟を出て、いつものように学校の象徴のような大聖堂へと向かった。

そこなら、不特定多数の雑音が雑音を打ち消すから、ピンポイントで今のような下らない噂話を聞かされるよりマシだろうと判断してのことだったのに。

目指す回廊が近づくにつれ研究棟など比較にならないほどの賑わいがアラムの耳に届いた。

「おお、君とまたここで会うことが出来るとは！」

「どうじゃね、十数年振りに戻ってきた学院は？」

回廊の一角に普段の数倍増しの人垣が出来ていた。しかもその構成員の殆どが、床までつきそうほどの白いひげを蓄えた教授だったり、顔の半分以上を眼鏡が占拠する王宮魔導師だったり、凡そ日頃研究室の外で見たことがないといわれる層々たる面々が誰かを取り囲んでいる。

その誰か。アラムよりも十近く上だろう、黒い髪の男。どこかのお屋敷で雇われているかのような、お仕着せを来ている人間が何故骨の髄から実力主義に染まりきっている学院のお偉方の中心に座せるのか、理解が出来なかったのだが。

男を取り囲む教授の一人がアラムに気付き、手招きして呼び寄せたのを機に、アラムもその一角にまぎれ込む。

「おや、アラム、アラム・ベリエル！丁度良いところに来た、紹介しよう、こちらは学院の卒業生の……」

「レイ、と申します。君がアラム君ですね。お噂は何時もお嬢様より窺っております」

仄かな親愛の情をおり込んだ笑顔での挨拶。差し出された手を握り返しながらそれでもアラムは状況が掴めず首をかしげた。

「お嬢、サマ？失礼ですが、俺のことを誰から……？」

「ジョゼフィー又じゃ。レイは彼女の家庭教師なんじゃよ」

「学院に属しておったときは我輩の城の研究の手伝いもしておったんじゃ」

「レイはわしが教鞭をとった生徒の中では抜群に優秀で、今のアラムにもひけを取らんぞい」

「お恥ずかしい限りです。私などとても……」

手放して誉める教授の言葉にレイがはにかんで見せると、アラムの隣にいた教授が鼻息荒くその言葉を遮った。

「いいや、この間のジョゼフィー又の答案を見たが、魔法構築理論の随所にそなたの理論構築手腕が見えた。おまけにそのお蔭で研究もぐんぐん捗つてのう、ワシは余りの嬉しさにジョゼフィー又の解答に追加点をつけてしもうたわい」

……つまりは、あの学年末試験でアラムが主席を奪取できなかった最大要因が、これか。

アラムの中で彼の評価が急落していく。

「私を褒めても学院に戻つたりはしませんよ、先生方。申し訳ありませんが、今の私はブリュイエル家に仕える者ですから」

「なんじゃい、年寄りに微かな希望を持たせる優しさも持ち合わせておらんのか」

「学院に戻ってくるつもりがないというのなら、今日はいったい何しに来た？」

「うちの困った不良お嬢様をお迎えに参りました。城に上がる者は上がったゲートと同じゲートから退出する決まりになってますから

ね。昨日夜会に行ったまままだ戻らないんです」

は？まだ戻ってないのか？とアラムが疑問をはさみかけた時、学院の奥の庭のほうから白いコットンドレスに身を包んだ少女と、黒い制服に身を包んだ男が連れ立ってやってきた。

「ああ、姫、今朝一番にお会いすることの叶わなかったこのクリスをどうかお赦しを！」

「あら、私のこと、まだ姫と呼んでも構わないの？聞いたわよ、マルグリッド殿下とのお話」

昨日いきなり勃発した二大ゴシップのそれぞれの主役が登場し、回廊中の衆目を集める。

そんな中ジヨゼがつんと澄まして話題沸騰中の話を振ると、居合わせたギャラリーが今一番の旬の話題を聞き逃すまいと一様に緊張に包まれた。

だが、そこは大貴族に生まれついた性質か、観衆を背負っているということに全く頓着せず、クリスはいつものようににへらっと笑ってほっぺたを掻いた。

「流石、姫は早耳でいらっしやる。何処のお喋り雀がそのようなことを姫の耳に入れたのか」

「昨日の夜は陛下や殿下の御厚意で私が後宮に逗留したことを知っててそんな事言うのね？」

ジヨゼが腰に手をあててむくれて見せると、周囲に電撃の如く動揺が走る。

これは王太子妃内定か！？と憶測が飛び交う中、クリスはぽん、と手を打ち鳴らした。

「ああ、そう言えば王太子殿下とこっそり夜会を脱け出した後お倒れになったんでしたっけ」

王子と夜会を脱け出してデート！？と周囲に意図的に誤解を与えつつ、クリスは大きく両手を広げて悲劇を吟じる詩人モードに突入した。

「おお、姫、王子の腕の中で儂くも気を失われたと聞いてこの私は

驚きと自分への不甲斐無さに胸が張り裂けんばかり。姫と最後に言葉を交わしてより月が昇り、そして沈み行くこの永遠にも似た暗闇の中で、このクリス、本を読んでは姫を想い、ピアノを弾いては姫を案じ、定めしこの世から太陽が消え去ったかのようでした」

「そりゃ夜に太陽が出てたら大騒ぎだわね。たった一晚で何を大げさな。王女殿下の事で頭いっぱい私のこと、忘れてたくせに」

「気のせいですよ、そんなに疑わないで下さい、姫。でなければ僕のこの胸の炎は悲しみの余り涙で消えてしまいます」

大観衆の只中で軽口を叩きつつける二人を、アラムは複雑な気持ちで見ている。

いつものように、ジヨゼに怒りながら普通に話しかければ良いのに、まるで石像のように足が竦んで動けない。

まさに字のまま雲上人である王族との艶聞が取り沙汰される貴族の人間と、城に上がる資格すら有さないスラム出の自分。今までは真に魔法の実力のみの評価軸しか無かった三人の間に、新たな軸が突き刺さった心地がして、アラムは心臓が鷲掴みにされたような痛みを感じた。

(何なんだ、俺は、どうして　！？)

「大丈夫ですよ、アラム君。君もいずれはあちら側になる素質が在ります。……僕と違って」

突然ぼん、と肩を叩かれて、アラムはきょとんと傍らの男を見つめた。

一体何を言ったのか、理解が出来ない。

と、アラムを呼んだレイの声が耳に届いて、ジヨゼとクリスが観客の中のアラムに気付いた。

「アラム！そんなところに居たのかい！」

「お久しぶりね、アラム！昨日も会ったけど！……て、あら？なんでレイがそこに居るの？」

口々に自分の思った事を口にしながら金髪の二人が近づいてくるに連れて回廊中の注意の焦点がアラムの回りに戻って来る。

「……よお。久しぶり」

笑顔で近づいてくるジヨゼに精一杯努力して緩めたつもりの仏頂面
でアラムは挨拶した。

その努力を踏みにじらぬよう込みあがる笑いの波をこらえつつ、レ
イも口を開く。

「やっと捕まえましたよ、お嬢様。まったく、どこをふらふらして
たんですか」

「だからどうしてレイが私を探すの？そもそもどうしてレイがここ
に居るのよ？今まで一度だってレイはうちの屋敷から出たこと無い
じゃない？」

「もちろん、いきなりの社交界でいきなり朝帰りをやらかす不良お
嬢様をお迎えにあがりました。お屋敷ではお嬢様の『大好きな』小
父様方が手薬煉ひいてお待ちでしたね、使用人一同仕事になりませ
んのでとつと戻っておもちゃにされて、使用人に平穏な労働環境
返して下さい」

「うげっ」

ジヨゼは苦虫を噛み潰したかのような表情になって、咄嗟に隣に居
たクリスマスに縋りついた。

「な、何しに来てるのよ、昨日の今日で」

「昨日の今日だからこそ、でしょうね。色々伺いたい話があるので
しょう」

何処か投げやりな口調でレイが答えると、クリスマスも天使の羽を撒き
散らしつつそれに続いた。

「きっと小父様たちも麗しの我が姫に会わずにはいられない心境な
のでしょう。私の姫を崇める者どもが増えるのは喜ばしいこと、な
れど私は考えてはいけないことを考えてしまいます、何故姫は私だ
けのものとなつてくださらないのか。ああ、姫、私に少し手も情け
をかけるお気持ちがあるならばこのクリスマスを奴隷第一の座に据え置
いたままにしてください」

いつものように一頻り喋り終えたクリスマスがジヨゼの手にキスをしよ

うとして、ふとその手に光る赤い石に気がついた。
その途端、レイの表情が凍りつく。

心なしか、声まで震えて。

「……お嬢様、この指輪は？」

「え、ああ、エルネスト殿下が下さったの。それがなにか？」

ジヨゼの言葉にギャラリーは固まり、クリスは雷にでも撃たれたかのごとく後ろによるめき、そして。

「会って一晩で婚約ですか。お嬢様が色事にこんなに電光石火であらせられるとはついぞ知りませんでしたよ」

溜息混じりのレイの呟きは、静まり返った回廊に波紋が広がるように広がっていく。

「こ、ここここ婚約!？」

「おお、姫、私という者がありながらかくも冷たい仕打ちをなさるとは!ああ、でも、姫に与えられた愛の試練といたのであればこのクリス、姫をさらって地の果てまでをも逃げて行く覚悟がございませすが何分親もそろそろ耄碌してきておりましてそんなことをしては心の臓を止めてしまうのは間違い無くそのようなことは不憫で何とも成し得難く……」

「ああ、もう、クリスは黙ってて!!」

ジヨゼは縋りついてくるクリスを振り払うとレイの胸ぐらを掴んだ。

「一体どうしたことよ!説明して!!」

「どうもこうも、男が女に指輪を贈るだなんて理由は古来より一つしかないでしょう。それにお嬢様がお持ちのそれ、どう見ても古式ゆかしい王家伝来製法の結婚指輪ですし」

ジヨゼは啞然として指にはまる宝玉をみた。

そんな大層なものだとは思わなかった。だって、王子は「これさえあれば城の中で不自由しませんから」というだけで……。

そりゃ、王子の婚約者ともなれば不自由する筈がない。

「騙された!」

ジヨゼは痛烈に舌打ちすると憤然としてレイを放り出してくるりと

踵を返すと、憐れな観衆を薙ぎ倒しながら一目散に奥の庭を目指して駆け出した。

「私の説明が足りませんでした。あの指輪は正確には婚約指輪ではありません」

そう、レイが溜息と共に釈明した。

城に上がるゲートに再度突撃しようとしていたジヨゼを何とか引きとめることに成功したレイは、ブリュイエル邸への道すがら、こんこんと解説を付け加える。

「城には数々の防御魔法が張り巡らされています。それは城を守るものもあれば王族を守るものもある。それらの魔法に全く阻まれることがないのは唯一王族のみです。その指輪の石は王族の血を材料に作られる魔道具で、持ち主に王族と同じ資格を与えるものなのです。そういう効果を持つからこそ王家の血を持たない婚姻相手を王族に列するため婚約指輪として利用されてきた代物なのですが、

王子の解説は簡単すぎるとはいえ的確ですし、誤りではありませんね」

「成程」

ジヨゼはひっきりなしに痛む頭を押さえつけた。これで後宮逗留中の侍女たちの態度が納得できるといふものだ。

「でもなんで王子は私にそんな大変なものを……」

「お嬢様が城の研究をなさるからですよ。心当たりはございませんか？王族のみが立ち入りを赦されるところに……」

「まさか、玄室!？」

ジヨゼがひっくり返った声を上げると、レイも静かに頷いてそれを肯定する。

「城の研究をゆるされたものには特別に玄室への立ち入りを許可するため、指輪の貸与が認められます。ですがその審議は慎重に慎重を期すため長引きますし、殿下は恐らくお嬢様がまた玄室に入りたがるだろうとお心を砕いてくださったのでしょ……お嬢様、後

宮に居た半日、いったい何をしてらしたんですか？」

「う……」

額に冷や汗を浮かせて更に足早になったジヨゼを、後ろから深い深い溜息が襲いかかった。

「やはり、予想通り後宮で浮かれ遊んでいたんですね？」

「だって、朝ごはんに見たこともないものが出たのよ！ぶよぶよで透き通ってて、なんだろう、もしかしてお魚かしらって気になって気になって、そうしたらマルグリッド殿下が私にいきなり襲い掛かってくるんだもの！それから！……って、あれ？」

レイにどれだけ自分を大変なことが襲ったかということを手張しかけて、ジヨゼの脳裏をふと疑問が通り過ぎた。

そういえば、あの時。

「……ねえ、レイ。この指輪って、王族じゃない人に王族同等の資格を与えるものなのよね？」

「……ええ、まあ」

王女はこの指輪と同じ物を持っていた。すなわち、王女は『王女』じゃないということ……？

ということは、王女は王の娘ではなく、ということは、王妃は不倫……？

「~~~~~！！」

いやいやいやいやいやいや。

ちよっと待て、とジヨゼは自分の暴走しかけた思考回路を押しとどめた。

幾らなんでも高貴な人にいきなり不埒な罪状を疑うなんてこと、赦されない。

ていうか、ジヨゼの身には余る問題だ。そういう大きいゴタゴタは小父様たちが面白おかしくやってくれてればいい。出来ればジヨゼの係のないところで収束すると尚良し。

果てしなく現実逃避な結論を纏めあげたとき、レイはさっくりと話を切り替えた。

「何が気になるのかは知りませんがとりあえずは今の話に戻しますよ。お嬢様、今日はとつとお屋敷に押しかけてきてる公爵様たちをあしらって追っ払ってくださいね。それからとつと支度して、暫く王宮に上がっていただきます。あの部屋に残る魔術構成を全部ノートにコピーしていただきますから。とりあえずお嬢様の卒業研究はまずそこからです」

レイがさらっと出した課題に、ジョゼは愕然として本気で目の前が真っ暗になったと思った。

「あ、あの膨大な魔術構成を全部書き写すの!? 無理よ!」

「大丈夫です。私の場合一ヶ月ほどで出来ましたから」

「レイは異常なのよ!! 貸してくれたっていいじゃない!」

ヒステリックに叫びを上げたジョゼを、レイは冷ややかに見据え、そして厳かに託宣を授けるかのごとく宣言した。

「……お嬢様、筆写が終わるまでお食事デザート抜きです」

「がーん、とジョゼを大きな衝撃が襲った。だが、それにめげるようではレイの教え子は勤まらない。ジョゼは出来る限りありつただけの悪口を並べ始めた。

「レイの意地悪! 極悪非道の冷徹魔人!! それから、それから……」

「!!」

「お嬢様」

不自然にこやかな声に釣られて恐る恐るジョゼが視線を上上げると、滅多に見られないレイの極上の笑顔がそこにはあった。

「王宮で良いもの食べ過ぎて少し太られたものではありませんか? 私がお育てするからには完璧なレディになっていただくかなくては困りますからね。そうですね、明日からと言わず今日からダイエットしましょうか。そうですね、断食などは如何ですか?」

「!!」

ジョゼの表情が瞬時に凍りついたのを見てレイは勝ち誇った笑みを浮かべ満足げに頷いた。

「ようやく年上の人間の言葉に素直に従う心が出てきたようで、大

変嬉しゅうございます。これも長年にわたる私の教育の賜物ですね」

「……レイのは脅迫って言うのよ」

「当然の要求ですよ。私が監督を務める私の生徒が私の専攻であった城の研究をすると言うのに、公爵様たちの茶々が入ってもう一月以上も学業が滞ってますからね。今の状況判ってますか？お嬢様はまだ研究のスタートラインにすら立ててない状況なんですよ？城の研究の根幹をなすのは城の魔術構成。どんなに高名な魔導師でも、いいや、後世に名を残すほどの力の在る魔導師だからこそ写本作りから研究を始められました。なのにそれを人のものを借りて楽をしようだなどと、なんと嘆かわしい……」

「ああもう、判りました！判ったから！自分の力で写本作ります！」

根を上げたジヨゼが叫び声をあげると、レイは冷ややかにその決断に切りつけた。

「当然です。偉そうに言わないでください。ま、ご褒美として暫く公爵様たちの邪魔は防いで差し上げます。これ以上研究を滞らせるわけには参りませんからね。とっとと写本作って研究始めましょうね。私の生徒が生半可な論文書くだなんて許しませんから、昼夜関係無くバシバシ気合入れていきますよ」

天使のように穏やかな微笑を浮かべながらごり押ししてくる人間が最も怖いと言うことを、ジヨゼは改めて思い知った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4653i/>

空ノトリカゴ

2012年1月14日12時49分発行